

LA REVUO ORIENTA

浩

J
A
R
O
I
X
·
N
I
R
O
2
·
F
E
B
R
U
A
R
O
·
1
9
2
8

MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

第九年

第二號

目次 (ENHAVO)

勝利の日は近づく.....大井學	33
TRA ESPERANTUJO	
海外消息及内地報道.....	34
POR LERNANTOJ	
エスペラント初級講座.....松本清彦	40
誌上放送エス語講座.....吉野櫻雄	42
我が學校生活より〔對譯〕.....森 露 夫	44
フアラオーノ〔泰西エス文藝紹介〕.....曾 根 一 郎	46
華の巴里にて〔滯佛日記より〕.....小坂 狷 二	48
和文エス譯添削欄.....編輯 部	50
ザメンホフの著書より.....松本清彦	52
單語語記法.....川崎直一	53
つみ菜集.....小坂 狷 二	54
LITERATURO	
本當の生〔萩原井泉水原作エス譯〕.....佐々城松榮	55
2928年3月21日.....S T O J A N	56
ALDONO	
日本エスペラント學會會計報告.....	62

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

TOKIO, Uşigome-ku,
Şin-Ogaűa-maűi III-14.

[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]

新小川町三ノ宮
東京市牛込區
財団法人日本エスペラント學會發行

編輯 後 記

★二月號から定期にだしたいと思ひながら一月號のおくれた隋性で原稿の集り方の悪かつたのと役員會その他の會が多かつた所へ別項記載の様にラヂオの後をうけて學會主催で初等中等の講習を1月16日から28日迄やつたのでその方へ暇をさられ其上學期試験前の者や就職口探しの連中で仕事はかゝらず遂發行日が今日になつて申譯ありません。

★大石、土岐、小坂、アレキサンダー嬢の歡迎會は久しぶりの盛會で約百名出席者があつた。

★議會も解散になつたので請願書は學會へ保管のゝまでです。いづれ臨時議會の會期が相當あれば提出します。會期が短くてだめならその次の議會へまへまへします。

★理事會や評議員會が1月にあつた。委しい事は雜報欄に。

★來月號から「會員の聲」欄を新設します。なるべく要領よく短く書いて御投稿下さい。エス文和文どちらでも。紙上匿名は場合により差支へなきも投稿者は必ず姓名を御明記下さい(會員に限る)。

★編輯上の御意見御希望を歡迎します。尙御投稿何によらず歡迎致します。

日本エスペラント學會編輯部

新 理 事

次の二氏は新しく學會理事として中村理事長より指名さる。

鐵道省技師

東京朝日新聞調査部長

小 坂 狷 二

土 岐 善 磨

新 評 議 員

評議員の任期は一ケ年故すべて新しく改選される事になつたので中村理事長より1月29日付にて新たに次の人々が指名された。東京をさられた人々をのぞいてすべて重任新に二名だけ新任。

井上萬壽藏	堀 真 道	栗飯原 晋	安黒才一郎	大島 義 夫
中垣虎兒郎	小林 東 二	徳田 六 郎	宋 禹 憲	越田重五郎
鈴木正 夫	福富 義 雄	松本 清 彦	保坂成之	平岡 昇
守 隨 一	岡本 好 次			

學會 主催 エスペラント常設講習

會員多數の希望により學會にて今後常設講習を設置することになりました。唯會場が狭いので申込者廿名以上に達する時はおこさわりするより外ありません。

★初 等 科 (三ヶ月を一期間とす)

會 場——東京市四谷區旭町四 二葉保育園

期 日——毎週木曜日午後7時—9時(但し2月9日第一回は特に6日の月曜日にします。)

會 費——月 50 錢

教科書——井上氏エスペラント讀本 (30 錢)

★中 等 科 (毎月大體同程度)

會 場——牛込區新小川町3の14 日本エス學會

期 日——毎週金曜日午後7時—9時 會費——毎月 50 錢

教 材——當分當方にて無料提供

學會 研 究 會

水曜會
會話會

毎週水曜日午後正七時より(時間勵行します)學會にて研究會をしてゐます。此度から George Dandin をよみます。出席歡迎。會費無料。

毎月第一第三の土曜日晚に學會で催します。會費無料。

東京市牛込區
新小川町3の14

財團
法人

日本エスペラント學會

振替口座
東京 11325 番

LA REVUO ORIENTA

★ JARO IX, N-RO 2 ★ MONATA ORGANO DE J. E. I. ★ FEBRUARO, 1928 ★

勝利の日は近づく

學會理事 大 井 學

丁度それは今より三年前であつた。私は外國のエスペラント雜誌を見てゐた時に奇蹟的な事實の報ぜられてあることを發見した。獨逸のケーニツヒスベルグの放送局がエスペラントの講習を放送した所そのテキストが1200冊賣れたと報ぜられてあつた。私はその時ラヂオの廣した威力の偉大なることに感ぜざるを得なかつた。そうだ 1200 人にエスペラントの講習用書を手に渡す爲め、吾々の先輩が苦心した努力は如何に大であつたことだらう。嘲笑と侮蔑と偏見の中にあつて 1200 名の講習者を得る爲めには想像以上の犠牲と努力を拂つたに違いない。大正十四年度のレグーオ・オリエンタが獨逸のこの盛況を引用したる後日本に於てかゝる事實の到來し得る日は一體いつの頃であらうとの記事を掲げたのを見たのはそれから直ぐ後のことであつた。

然し時は日本をも訪れた。三年前より抱いてゐた憧憬が遂に現實となつた。東京中央放送局はエスペラント放送講座を開設した。そして小坂氏と不肖私が之に當ることとなつた。3000部のテキストは忽ち賣切れた。發行部數は 5000 を數へた、然し需要はそれ以上を要求した。漸てテキスト 10000 部賣切の聲が聞へた。開講第一日に於て總賣上部數15000を突破した。この數字は何を意味してゐるのだらう。ケーニツヒスベルグの 1200 のテキストは3年後の東京に於て十數倍の姿になつて現れた。この數字は在來迄行つてゐた諸外國語のテキストを遙かに凌駕した。

エスペラントは今や勝利の日に近づきつつある。世界に散在した同志の不斷の努力と犠牲が今日のこの結果を作り上げたのだ。エスペラント創造者ザメンホフ博士の頌つた詩の一節が胸に響きわたつて来る。

Ni semas kaj semas, neniam laciĝas

Pri l' tempoj estontaj pensante.

Cent semoj perdiĝas, mil semoj perdiĝas, —

Ni semas kaj semas konstante.

“Ho, ĉesu!” mokante la homoj admonas, —

“Ne ĉesu, ne ĉesu!” en kor' al ni sonas:

“Obstine antaŭen! La nepoj vin benos,
Se vi pacience eltenos.”

吾々は播き播きて疲れず、

未來の時をのみ憶ひて。

百の種子は失はれ、千の種子は失はるるも、

吾々は斷へず播きなほ播き續けるなり。

『おゝ、止めよ』と人は嘲けり諫ふ、

『止めず、止めず』と我心に響く

『執拗に進め! 子孫は汝を祝福せん、

若し汝辛抱強く忍び通さば』と。

播いた種子は何日かは刈り取られねばならない。先驅者の殘した仕事は今吾々の手によつて將に仕上げられ様としてゐる。だが吾々は未だ氣を許してはならない偏見と無理解は尙エスペラントの前進を妨げてゐる。國民間の言語より生ずる障壁を打破し、中立的基礎の上に立ちて各國民が相提携し人類文化の發展を圖らねばならない。其處にエスペラントの大なる使命がある。吾々はエスペラントを學ぶことに大なる意義を見出す。そしてこの人類共通の言語を一人でも多くに知らさなければならぬ。丁度電話がその加入者の増加により一層効力を發揮する如く。(附記。放送講義中各地の同志諸兄弟より寄せられたる熱烈なる激勵の辭を有難く接受いたしました。が、この機會に於て厚くお禮申し上げます。)

海外報道

第二十回萬國エスペラント大會

本年の第二十回萬國エスペラント大會は八月三日より十一日にかけてベルギーの首府アントワープ市 (Antwerpen, Anvers, Antwerpen.) で開催される。同市は曾て1911年第七回萬國エスペラント大會の開催された地であつて已に一度萬國大會の経験を踏んで居るし同地の大會準備委員會は K. R. の會計秘書であつて組織に妙を得て居る Frans Schoofs 氏等の統帥の下にあるのでさぞかし行き届いた準備がされるだらうと豫測されて居る。加ふるに同市は歐洲東北部の中心を占めて居り英佛獨和蘭等に隣接して居て好都合の地にある故本年の大會は未曾有の盛況を極める事と見られて居る。英國のみにても 400 名以上の參會者ありと見越して英國エスペラント協會は特別列車及び特別の汽船を已に契約して大々的 karavano を計劃し、獨逸に於てもルドルフ・モツセ社のエスペラント部は karavano の計劃を發表し組を三組に分けて獨逸各地方より同市に乗り込む豫定が出来上り參加者を募つて居る。

昨年 of ダンチツヒの大會には八名の日本同志參加して大いに極東の意氣を示したが本年度も此れに劣らぬ參加者を見たい。御希望の方は學會宛御申込みになれば參加申込書をお送り致します。

ロシヤ革命十週年記念

既に昨年十一月號の本欄にて報じた如く去る十一月に催されたロシヤ革命十週年記念祭には世界各方面の代表者を多數國賓として請待し盛大に行はれたが、そのうち同國エスペラント聯盟は九ヶ國より十二人のエスペランチスト (ドイツの Lerchner, スエーデンの Adamson など SAT の一流の闘士連) を招待した。然るに他の會より招待された人々のうちにもエスペランチストが見出され (たゞへば我國の秋田雨雀氏) 合計12ヶ國より23人のエスペランチストが集まつたことになつた。この事實は立派にエスペラントの普及發達を物語つてゐてよろこばしい次第である。

彼等は皆常にエスペラントを用ひ、又モスクワ・キエフなどでラヂオ放送をした。(秋田氏もモスクワより放送した由である。)かくして、エスペラントそのものの宣傳の爲めにも大いに効果があつたこのことであつた。

オランダの國際會議

今夏オランダのハーグにて開かれる宗教平和會議は昨年ブラーハにて行はれた「平和と學校」會議の如くエスペラントを唯一の翻譯語とすることに決定した。ちなみに同會のエスペラント部の幹事は有名なイスブルツカー夫人である。

なほ同國オムメスにて開かるべき「世界青年平和會議」にてもすべての演説はエスペラントに翻譯されることになつた。

最近日本をおとづれた同志ルーマニア人バラズ君は同會議のため出席者を派遣する様各國をこままはつてゐる人である。(昨年十二月號本誌參照の事、同氏はその後京都、大阪へも來ました。)

禁煙協會

昨年十一月下旬オーストリーのウィーン市で同協會が禁煙宣傳の展覽會を開いたが、エスペラント排煙協會も一室を占領して、同運動に對するエスペラントの應用について示しエス語のピラ等をかゝげた。尙同運動に就いてくわしい事は Esp. Tabakkontraŭula Asocio, Wien I. Judenplatz 6 Aŭstrujo. へ照會の事。

ラトビヤ・エスペラント大會

昨年の十月三十日、三十一日に同國首府リガ市に於て第一回ラトビヤ・エスペラント大會が開かれた。文部大臣を名譽會長におし、以下80名の參加者が、この小國に於て集まつたこと云ふことは、盛んであることが思ひやられる。

佛國大學エスペラント聯盟

フランスの有名なツールーズの大學が主になつて昨年十二月末にツールーズに於て、同市の補助を受け、同聯盟の第一回大會を開き、同時にプリバー博士などを招き大宣傳會を催した。尙同聯盟は、フランス一國のみに限らず、國際的に廣めんと各國の同志の團結を求めてゐる。我國の各大學の同志も一應下記にまで通知されんことを望む。

Cercle Esperantiste Universitaire, (por E. R.), 8, rue. Bacur-Lormian, Toulouse, France.

尙最近フランスではパリー大學その他にもエスペラントをやる熱心なる同志ふえ、近き將來に於て、大なる發展をなすであらうと目されてゐる由。

ジュネーヴ大學とエスペラント

ジュネーヴ大學では公式に、文學部に於てエスペラントの高等講義をおくことに決定しエドモン・ブリバー博士にエスペラントの歴史及び教授法を講ずべきことを命じた。

エスペラントの結婚

昨年十一月二十七日、エストニアの首府タリン市に於てチエツコ人のAntonie Chlumskyさんとエストニア人のKristoph-Ferdinand Reim君とが結婚した。御兩人ともその互の母國を知らず、家庭では„Internacia Interkomprenigilo“ エスペラントを用ふる由。市の役所で行はれた結婚式も司會者 Valter 氏がエスペラントを知らなかつたため同役所のAvesson氏が通譯した。

ゼンフ切手商會

ドイツ・ライプツイヒにある世界的に有名な大郵便切手商ゼンフは毎年「切手カタログ」(全世界にてこれまで發行された切手を細大もれなく登録したもの、切手の辭書とも稱すべきもの)を發行してゐるが、ドイツ語なので外國には困るだらうと、今年より„Übersetzungstafel philatelistischer Fachausdrücke in fünf Sprachen“ (Traduktabelo de filatelistaj Fakesprimoj en kvin Lingvoj) を發行し外國人の購買者に配付することになつた。同表は獨、英、佛、西、エスペラントの五語を並べたもので、以てエスペラントが既に所謂主要國語に列せらるるに到つたことを物語つてゐる尙同商會發行の Illustriertes Briefmarken Journal (Ilustrata Poŝtmarko-Jurnalo) の昨年十二月十五日號にはエスペラントに就いて可なりくわしい説明記事が出た。かつてロシヤより SAT 大會記念切手が出た時、SAT の意味を知らなかつた同商會も時勢の然らしむる所に従つたのであらうと思はれる。

エスペラント自由學園

一世紀以前に百五十戸の民家を有した村落として現在にあつても百五十戸の民家を有する村落、この平和に眠つた片田舎の村に二つの新しい變化が起つた。一つは陸のある所すべてに侵入する自動車の車庫が出来た事と、も一つは世界にも珍しい又北米合衆國にあつては最初のエスペラント學校の創立である。

北米合衆國オハイオ州の美しいオハイオ丘

に包まれた人口三百に過ぎない一僻村リソボリス (Lithopolis) と云ふのがこの村落の名であり、老齡なほ矍鑠として絶ゆることなく北米の小説を翻譯するペyson 老 (Edward S. Payson) の親友である Mabel Wagnalls-Jones 夫人及びその夫君 Richard J. Jones 氏がその創立者である。エスペラント教授は已に始められ同村の小學校兒童や教師を集めて講習をやると共に成年者に對しても同夫妻の父母を記念するワグナルス記念會館 (Wagnalls Memorial) に於て彼等夫妻は自ら教鞭を執つて居る。

米國の大通信社「聯合通信 (Associated Press)」は各地新聞にこの新舉を報じて曰く、「鐵道線路より數哩離れ未だ乗合自動車の洗禮をすら受けないオハイオ州のこの僻村リソボリスはやがて國際補助語エスペラントの上に建てられた見えざる帝國の首都となるであらう……」と、同夫妻は新聞記者との會見に際して曰く、「若し萬人がエスペラントを習つたならば國際的了解國際的友情に資すること多大でありませう。私達は先年エヂンバラの萬國エスペラント大會に出席致しまして9ヶ國語を代表する各代表者達と共に居りました。彼等の言語は絶對にお互ひに了解出来る者はありませんけれども彼等は自由に流暢にエスペラント語でお互に話し合つて居りました。若し全文明國の人達がエスペラントを知る様になつたらどんなでせう。私等は私等の望む國際的了解と國際的友情への一里塚としてこのエスペラント語の知識と使用を普及させると云ふ抱負を持つてこのエスペラント自由學園を始めたのであります云々」。又夫君ジョーンズ氏は云ふ「エスペラントはこの國際的相互了解と云ふ事の他に又他の便役もあります私達が歐洲を旅行した時に私達は國境と云ふ想像的一線を越える事がありました。この線の片側では佛蘭西語を話さなければならぬところが數インチこの線の中に踏み込みますと獨逸語を話さなければならぬ。エスペラントはこの障害を排除し旅行者の面倒を非常に省いてくれます。エスペラントの分野は二重であつて理想的方面と實利的方面を兼ね備へて居ります云々」。

この様な抱負に加ふるに、教場には前記の如き記念館を有し貴重なエス語文献やペyson 老の藏書を備へた圖書室を有する彼等の今後の仕事に對して吾々は滿腔の同情と激勵を以て一層の進展を望みたい。

(Sisido-K. k. Mori-N.)

道 報 地 内

第十六回日本エス大會豫告

大會準備委員會ハ一月十四日大阪 Esp. 會例會ノ協賛ヲ經テ茲ニ大會ノ大綱ヲ全國同志 諸兄ニオ知ラセスル事ニナリマシタ。何卒御聲援御助言ノ程オ願イ申シマス。

期日：四月七・八日（土・日曜日）又ハ其以後ノ土日

場所：大阪市内但シ會場目下交渉中。

プログラム大要：

土曜日：晚發會式（約一時間半）——各地代表挨拶；大會協議會（約一時間半）——重要議案提出説明。

日曜日：學會維持員會（二時間）；分科會（二時間）；協議會續キ（二時間）——次年度大會地詮衡：及ビ「本大會新案」解散茶話會（二時間）

詳細及ビ議案大要ハ三月號ニ

發表致シマス。

提案者、分科會主催者、地方會ニ御注意

議案、分科會（準備委員會ハ特ニ之ヲ準備セズ主催者ヲ求ム）ノ内容ハ是非本誌三月號ニ説明シタク思イマスカラ二月末日迄ニ下記準備委員會マデ 1) 趣旨（理由ヲ含ム）、2) 順序形式（分科會）、3) 提案支持者十名以上或ハ主催者五名以上（但シコノ項ノミ遅ル、モ可）御通知下サイ。

短時間ニ相當量ノ議案ヲ消化スルノデスカラ議事整理ノ上カラ云ツテモ採決權ノ標準ヲ決メル事ガ肝要ト存シマス。コノ第一ノ標準ハ無論地方會デスカラ各地地方會ハ是非次ノ各項目ヲ準備委員會マデ御通告願イマス。

- 1) 名稱
- 2) 組織（純地方團體ナリヤ特殊目的ヲ有スルヤ、及ビ會員中他ノ地方會ト重複セラル、方ノ人數）及ビ人數
- 3) 通信宛名
大阪府下岡町壽通四丁目 奥村好太郎様
氣付 藤間常太郎氏宛（「大會某々の件」
ヲ添書ノ事）

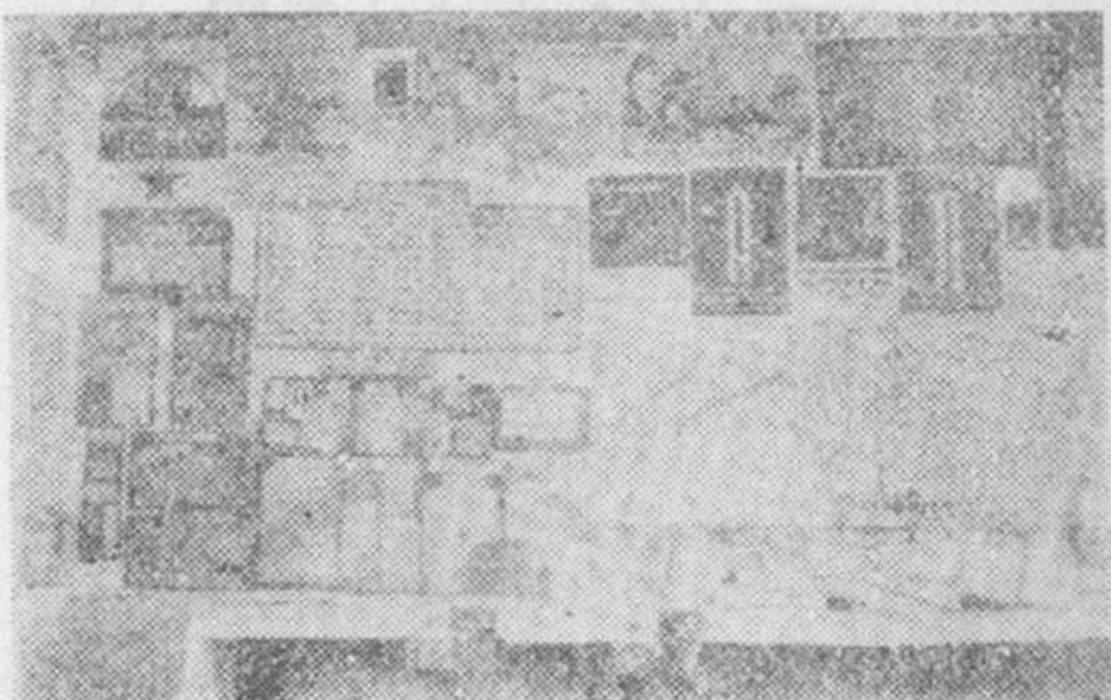
東京記者聯盟とエス語

東京をはじめ全國に凡 2,000 の會員を有する東京記者聯盟（Jurnalista Ligo Tokia）はその常任幹事會で Esperanto を Oficiala Lingvo Internacia として採用する事を決定し早速今年の2月號から其雜誌「號外」にエス語表題を入れた。近く各國記者團、無產團體、各國エスペラント會等へメツセージをエスペラントのみで發送するこの事。尙一二月後に號外にエスペラント欄をおき二月からは常設エス語講習を開く。その他日本社會運動通信をエス語で發行する。エスペランティストで記者生活の経験ある人又は將來記者たらんとする人はどうか入會して欲しい。又激勵文を送つて欲しい。同聯盟に就ての詳細は東京神田一ツ橋際東京記者聯盟國際部丘幸夫君宛に。

東京

A. K. の大井、小坂兩氏の放送振りに刺戟され東京盲學校に於ては

同志横田、片岡氏等の熱心なる努力により約四十名を得て校内にエス會を組織し點字テキストにより1月17日より週3回宛會合、ラヂオの收獲の一つと云ふべきである。★五中のエス展1月14—15日の兩日府立第五中學校に開催された創作展を兼ね校内同志の手によりエス展開催、出品は數ヶ國單語比較表書籍雜誌及學會出品のもの第一會場内に斷然異彩を放つてゐた、兩日間の入場者 1,000 餘人、校内若



き同志の活躍は之からが見もの(高橋氏報)。

★過般のラヂオ放送聴取者中エス講義を希望する向多き爲め學會は右の便宜を圖り新宿の二葉保育園及學會事務所に於て何れも初等及中等の講習を1月16日より二週間に亘り開催、参加者50名餘、講師は小坂、大井、岡本、松本、徳田の諸氏。尙新宿の二葉保育園は今後學會の常設講習所として2月より開講することになった。(詳細は表紙裏にあり)

★クララ會——正月十五日午後一時より佐々城松榮氏方にて例會。出席十二名。關口、中村、安江、西村、三宅諸氏の談話、暗誦等があつた。

三氏歸朝歡迎會

一昨年秋我故國を後に米國に渡り昨春歐洲に亘り前後二ヶ年餘の外遊を終へ舊臘無事歸朝された小坂狷二氏と昨年世界一周の旅にのぼり到る處エス語を活用された東朝紙調査部長土岐善磨氏と昨夏會議列席の爲歐洲へゆかれた大石和三郎氏の三氏の歸朝歡迎晩餐會は去る1月29日神田の多賀羅亭にて開かれた。尙當日は最近再びバハイ布教の使命を帯びて來朝された Alexander 嬢の歡迎をも兼ねて行はれた。定刻18時には學會理事會出席の役員連を始めとして丘博士、望月博士、西博士、安武内務書記官、芬蘭公使 Ramstedt 博士、ラヂオテキスト發賣元北隆館主福田氏及同館出版部主任萩原氏等出席さる。尙初めての珍客としては法政大學講師李長春(學會々員)の來られた事である。會食列席者は五十餘名の盛會であつた。中村博士の挨拶について三氏を代表して大石和三郎氏の謝辭あり、續いてアレキサンダー嬢の salutparolado あり次いで李講師の挨拶あり。これにて宴をさち食卓を片付けて後東朝紙の好意により寫眞をうつしてもらつた。(寫眞參照) 次いで食事に列席せないものも多數參集の結果全員百名に垂んとする盛會にて椅子の不足で係員を大面喰はせた。八時過小坂氏たつて歐米遊歷談中興味の多い部分を流麗なエスペラントをもつて約一時間程に亘つて話された。終つて小坂氏がもちかへられた Privat 博士の Danzig 大會での parolado の gramofondiskoj を聞いた。音吐朗々世界隨一のエス雄辯家の聲咳に接することができて會衆一同大いに満足した次に大石氏が旅行談をされ最後にエハガキに仕掛をして美人の顔がニコニコ顔になつたり泣顔になつたりするのをみせて一同を笑はせ

た。土岐氏立つて新聞記者は筆と紙にしたしむものだから我輩も紙に書いた草稿を讀ましてもらひたいと許りに朗讀演説をされた。終つて再び gramofondiskoj に耳をかたむけながら愉快に一晩をすごした。

名古屋

當市出身在東京の同志倉地治夫氏がCKラヂオ放送のため來名されたるを機とし1月14日山田弘氏と同行し新愛知新聞社訪問支配人、編輯長、事業部長等に面談し國際語運動に對する日頃の好意に對し敬意を表する所あり。又市内の同志は1月11日晚同氏を中心としての座談會開催。★名古屋鐵道局に於ては白木欽松氏を講師として研究會開催中。★名古屋エスペラント協會は白木、山田、下村の三氏を講師としてエス語常設講習を開始した。中等科毎週火曜日。午後7時より、用書「倫敦塔」。初等科毎週金曜日午後7時半より。多數來會歡迎。詳細は大學病院前電停北半町東側同會宛紹介を。★公用で小坂狷二氏の來名の報に接し海外周遊談が聞けると同志の欣びは非常なもので既に歡迎會の用意萬端なりたるに同氏急病のため來名中止で一同落膽した。(山田弘氏報)

廣島

同縣坂井原村の小學校に於て自1月2日至5日岡山の同志難波金之助氏の指導の下に初等講習會開催、20名參加、終講後毎週三回研究會を開くことになった。

島根

1月15日安來町商工俱樂部にて西村光月氏エス語に関する講演を試み、參加者多數にてエス語普及上の充分なる効果をあげ得た。

米子

1月23日より10日間、19時より米子エスペラント普及會主催の下に講習會開催、受講希望者は同市麴町一丁目藤田商店内同會に申込のこ。

龜岡

自12月28日至1月6日同地シオン館に於て中等及速成科講習開催。1月10日より中等科及初等科長期講習開始。各科共に1週間3回1月10日、綾部にて1月10日よりエス語長期講習會開催。初等科50名中等科17名講師廣瀬、井上兩氏。

下關

關門の地の同志を中心に關門エスペラント俱樂部を創設、2月初旬より講習會開催豫定、同地通過の同志は是非共下關市立高尾病院内の同俱樂部を訪ねられたし。

若狹

猿橋章二氏の盡力にかゝる若狹本郷エスペラント會及び教育會主催にて、1月10日より速成講習會開催、講習生40名、講師伊藤榮藏氏。1月16日終了。尙伊藤

氏は14日青年團集會の席上普及講演をなし、亦本郷小學校長江上氏の依頼により同校兒童にエス語について講話をなしたところ、兒童は教師にエス語教授を懇望するなど普及運動に一新方面を見出したるは喜ぶ可き事也。

福岡

1月14日福岡エスペラント俱樂部の總會開催(詳報未着)尙、初等科(期日未定)、中等科(1月18日より毎水曜)、高等科(1月11日より毎水曜)の講習會を開くことになつた。★第五回九州エスペラント聯盟大會は4月上旬(1日か8日)長崎エス會が招待することに決定、各地の Samideanoj の大舉來崎を望む。大會に關する informoj は來月又は來々月號に發表。報道と朱書して學會内徳田宛に願ひます。

長崎

長崎の生んだ最もすぐれた esp-istino の一人たる城タカ子嬢は天津在勤の長兄の呼寄せにより嚴父と共に12月29日出發さる。前夜銀屋町クラブにて送別茶話會を催し記念として有志より鼈甲細工帶留贈呈。★長崎税關監視部長たりし我同志谷口恒二氏は今般大藏省主税局關稅課へ御榮轉1月21日出發赴任の途につかる。クラブにて18日18時より送別晚餐會を催す。出席者20名。高原氏の挨拶について同氏は大藏省内でも鐵道省内務省の同志の向ふをはつて何かやりたいと云はれた。★初等エス講習を1月23日より月水土曜日 19時—21時開催高原邸にて。講師迫文三郎氏。15名出席。既習者には木、金兩日講義。講師迫氏。高等講習は火曜日 Krestmatio 輪講。植田教授指導。

— 急 告 —

第五回九州エスペラント大會

1. 期日 昭和三年四月三日(祭日)長崎市にて。
2. Programo (追つて詳報す)
午前十時大會發會式。正午中食。後一時より大會協議會。紀念撮影。終に港内舟遊。午後五時より懇親晚餐會(支那料理)散會。
3. 四月二日夕 宣傳講演會開催。
4. 會費 金參圓(宿泊一圓五十錢程度)

九州エスペラント聯盟

主催 日本エスペラント學會長崎支部
(長崎市銀屋町 56)

仙臺

二高エス會の Senlacaj Samideanoj の努力にて同校圖書館に藏するエス語に關する書籍名一覽表及エス語學習に就ての Konsiloj を記載した afiso を各教室にはりつけ一般學生に對する注意を喚起した。

函館

1月8日(日曜日)例年の如く湯の川温泉兼樂園に於て Novjara kun-sido を開催す。11時井上幹事長開會を宣しエスペーロを歌ひ、小田島幹事、會計報告及び所感をのべ會長小森氏のエスペラントに就て有益なる講演あり後、我等の恩師、高桑先生の所感演説あり一同久方振りで氏の熱誠に接して感銘す。愈々第2部に移り小田島幹事指揮の下にプログラーモに従ひ室内競技初む。軍師拳、アップル・ゼケンス、kiu mano. 次ぎに同志 廣部繁氏、結婚記念として一同へ Tagmango の饗應あり、Esperanta hejmo に相應しく談笑裡に晝食を終へ、再び競技を初む。暗算競走、豆拾ひ競技、紙運びリレー、鐵砲撃ち、紙切りレー等を爲し餘興「顔無し兵隊」學生團「言葉の感違ひ」井上氏、次ぎに其の日の呼物「お國自慢の津輕の辨こ」を船越氏演じ會衆を抱腹せしめ、最後に幹事連の苦心して作れる Esperanta 福引きあり記念品を分け、Tagigo を歌ひ、吉田幹事の流暢なるエス語にて閉會の辭あり18時盛會裡に散會す。因に出席者20名にして當日の記事は市内4新聞紙に掲載された。尙昨年12月より當會機關雜誌 „Verda Radio“ 加藤氏等に依つて發刊せらる。

中津

大分縣中津エス會では1月14日18時よりヤバケイ俱樂部で新年會を催し、會員のエス語演説、エスペラント福引等あり頗る盛會にて會者30名。★昨年12月26日長崎醫大の淺田教授來津せられ當地同志と晚餐會の席上歐米綠の旅行談あり、翌日は石丸氏の案内にて耶馬溪を觀賞し別府へ向はる。★毎月2回サロメの輪講をなし初等紙上講習等を發行して宣傳に努む。(石丸氏報)

新聞雜誌とエス語

★山形高校講師デーテマン氏は1月17—19日の東朝學界餘談欄に於て「世界字母の制定」なる題目の下に「エス語」は「死物」だとの聞捨てならぬ暴言を吐いた。

★之に對し我等が闘士たる清見陸郎君はデーテマンの妄論を痛烈に駁したる後、エス語は「完全に生きてゐる」ことを宣明した(1月21日——同紙投書欄)(係より、このデーテマ

ンは Samideanaro の極度の反對を買つたらしく反駁投書は机上に堆積した。處がデーテマン氏は「死語」と云つた憶へはない、ただ「人造語」(Artefarita lingvo)だと云つたに過ぎない、それを譯者が勝手に mortinta lingvo の意に解して譯したから、かくなつたのだとの釋明書が山形より來た。何れにしても最近の Sami-aro の鼻息のとてもすごいことすごいこと)。

★東朝及大朝連載の「靈の審判」はノーヴァ、スーノ國大統領サヴォント氏の活躍振りは全國の青年子女をしてエス語に對する憧憬を持たせしめてゐる。

★國際語問題とエスペラントとの論題の下に堀内恭二君エスペランチストの爲めに萬丈の

氣を吐く(1月7日—17日)。

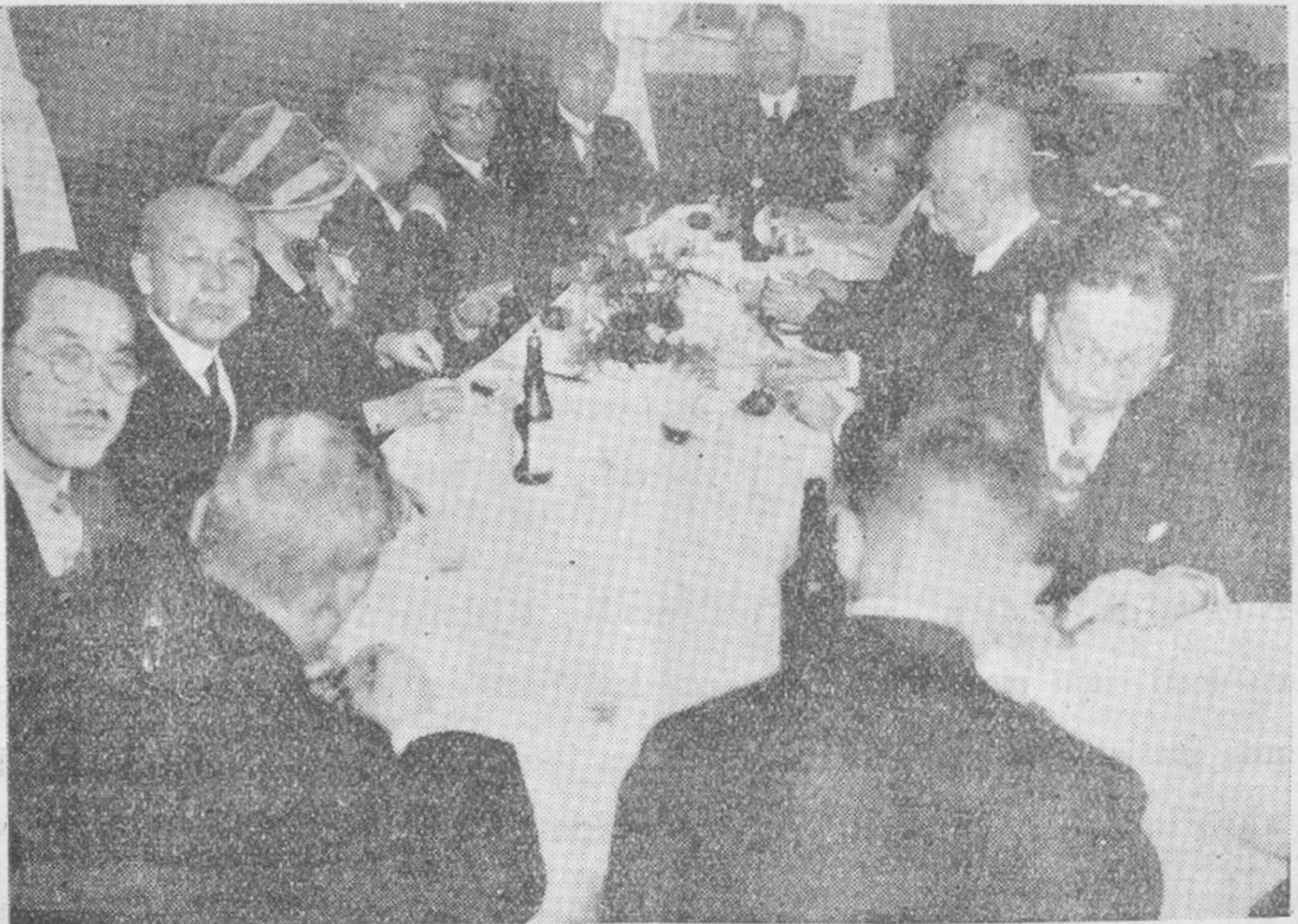
★函館エス主催のノヴァルコンダレーソを湯の川兼業園にて開催、記事(1月7日函館毎日)。

★學會主催のエス講習會、記事(1月12日—15日、都下各紙)。

★人類文化の發展とエスペラント論説(1月1日北隆館月報)——中村精男博士寄稿。

★鐵道とエスペラント(1月15日鐵道商報)——井上萬壽藏氏寄稿。

★北海道帶廣町の熱心なる同志農學士三田智大氏は氏の編纂にかゝる「實條農業簿記」の表題を「Praktika Librotenado en Terkulturo」とされた。この種の表題が今後各方面に現はれんことを望む。



〔寫眞説明〕 一月廿九日 大石、土岐、小坂、ア嬢歡迎晚餐會場の一角。向つて左より土岐善磨、大石和三郎、アレキサンダー嬢、ラムステッド公使、小坂狷二、美野田琢磨(學會理事)、上野孝男(學會理事)、清水勝雄(學會監事)の諸氏。ラ公使の向ひは丘淺次郎博士、ア嬢の向ひは中村精男博士。右前のうしろむきの人は李講師。その向ひは栗飯原評議員(記事參照)

エスペラント初級講座

【第五講】

守
則

1. 極く初歩の方々は、先づ譯文によつて、話の内容をつかむこと。(此度は譯文を可成意譯にした。)
2. 次に單語と語法の欄を原文中の番號によつて對照し、熟讀頌味すること。

Dio de dormo —Mardo—

Tuj kiam Hjalmar enlitiĝis,¹ la dio de dormo per sia sorĉa² ŝprucigilo³ aspergis⁴ ĉiujn meblojn⁵ en la ĉambro, kaj ili tuj komencis babili, kaj ili ĉiuj babilis nur pri si mem, esceptinte⁶ la kraĉujon,⁷ kiu staris silente kaj koleris, ke^a ili povas esti tiel vantaj,⁸ por paroli nur pri si, pensi nur pri si kaj ne aludi⁹ eĉ per unu vorto tiun, kiu staras tiel modeste¹⁰ en la angulo¹¹ kaj lasas^b kraĉi sur sin.

Super la komodo¹² pendis granda pentraĵo¹³ en riĉe orita¹⁴ kadro,¹⁵ ĝi prezentis pejzaĝon.¹⁶ Oni vidis altajn maljunajn arbojn, florojn en herbo kaj grandan akvon, kiun trafluis¹⁷ rivero, kiu serpentumis¹⁸ ĉirkaŭ arbo preter multe da kasteloj kaj malproksime enverŝiĝis¹⁹ en la sovaĝan maron.

La dio de dormo aspergis per sia sorĉa ŝprucigilo la pentraĵon, kaj tiam la birdoj sur ĝi²⁰ komencis kanti, la branĉoj de la arboj moviĝis, kaj la nuboj flugis tiel nature, ke oni povis vidi, kiel^c ilia ombro forglitas²¹ super la pejzaĵo.

Nun la dio de dormo levis la malgrandan Hjalmaron tiel alte, ke ĉi tiu²² povis meti siajn piedojn en la kadron kaj ĝuste en la altan herbon. Tie li nun staris. La suno brilis sur lin tra inter²³ la branĉoj. Li kuris al la akvo kaj sidiĝis en malgranda boado, kiu tie troviĝis. Ĝi estis farbita²⁴ ruĝe kaj blanke, la veloj²⁵ brilis kiel arĝento,²⁶ kaj ses cignoj,²⁷ ĉiuj kun oraj kronoj²⁸ malsupren pendantaj de la kolo²⁹ kaj kun radianta³⁰ blua stelo sur la kapo, tiris la boaton preper la verda arbaro, kie la arboj rakontis pri rabistoj kaj la floroj pri la ĉarmaj malgrandaj elfoj³¹ kaj pri tio, kion flustris³² al ili³³ la papilioj.³⁴ (Daŭrigota)

眠りの神 —火曜日—

ヤルマールが床の中へ入つて終ふと、眠りの神は魔法の噴水器で部屋中の器具へ霧を吹きかけた、すると器具は皆話をし始めました。而し器具は自分の事許りを話して、おとなしく立つてゐる唾壺へは振りむきもしなかつたので、唾壺は怒りました。「奴等は見え坊で自分の事許りを話し、自分の事許りを考へてゐるから、こゝやつて、温順しく隅つこに立つて、唾を吐かせてやつてゐる俺の事は一言だつて口にして呉れやしない」と言つて。

簞笥の上には立派な金縁の額に入つた大きな繪が懸つてゐました。それは風景畫でした。そこには高い老木や草の中に咲いた花などがありました。又大きな湖があつて、それを一條の河が貫流し、森を廻り多くの城の邊を通つて、遠く荒海に注いでゐました。

眠りの神は魔法の噴水器で、此風景畫に霧を吹きかけました。すると其畫の中の鳥は歌ひ始め、木の枝は動き、雲は如何にも自然に飛んでゆくので、雲の影が景色の上を通り過ぎてゆくのが見えました。

さて眠りの神は小さなヤルマールを高く差上げましたので、ヤルマールは足を額縁の中、丁度草の中へおくことが出来ました。ヤルマールはもう其處に立つてゐました。太陽は木の枝をすかして、ヤルマールの上にさしてゐました。ヤルマールは水の方へ走つて行つて、其處にあつたボートに乗りました。それは赤と白に塗られ、帆は銀の様に光つてゐました。六羽の白鳥がそれぞれ金の冠を頸へブラ下げ、頭にはキラキラした青い星をつけ、其ボートを森の傍へ率いて行きました。森では木々が盜賊の話をして呉れました。花は美しい小鬼の話や蝶が話して聞かせた事などを物語つて呉れました。(續く)

單語と語法:

(a)

1. en'lit'igi 床へ入る。 2. sorĉa 魔法の。
3. ŝpruci 噴出する, ~igilo 噴水器, 噴霧器。
4. aŝpergi 灌水する。 5. meblo 器具。 6. esceptinte ~n …を除いて, 除外して。escepte de ~ とも云ふ。
7. kraĉi 唾を吐く。~ujo 唾壺。
8. vanta 虚榮の, 見え坊の。 9. aludi 仄かす。
10. modeste つゝましやかに, 控へ目に。 11. angulo 隅。 12. komodo 簞笥。
13. pentr'aj'o 繪。 14. or'it'a 鍍金された。
15. kadro 畫縁。 16. pejzaĝo 風景畫。
17. tra'flui …を通つて流れる, 貫流する。 18. serpentumi 蛇回す。
19. en'vers'igi 注ぎ込む。
20. ĝi ~ pentraĵo. 21. forgliti 滑り去る, 滑る様に過ぎ去る。
22. ĉi tiu は後者の意味で

こゝでは Hjalmar を指す。 23. … tra inter の間を通して。 24. farbo 繪具, 顔料。~i 色彩を施す。 25. velo 帆。 26. argento 銀。 27. cigno 白鳥。 28. krono 冠, 花冠。 29. kolo 頸。 30. radi'ant'a キラキラ光る。 31. elfo 妖精。 32. flustri 囁く。 33. ili~floroj. 34. papilio 蝶。

(b)

a) ,ke ili povas esti tiel vantaj, por … …… する程、左様に見え坊だと言つて怒つた。 povas は奴等が圖々しくもそんな事を平氣でやれると云ふ氣持。

b) lasas kraĉi sur sin. 自分の上へ唾を吐く儘にまかせておく。

c) Oni povis vidi, kiel ilia ombro … 人々は雲の影が如何にその風景畫の上を滑る様に通り過ぎてゆくかを見た。

誌上放送 エスペラント講座

[JOAK ラヂオ・テキスト第 32, 33 頁講義]

[Anoncisto] J-E-I, J-E-I, こちらは日本エスペラント學會中央放送部であります。先般大井小坂兩先生指導の下に JOAK で放送したエスペラント語學講座は大成功裡に終りをつけましたが時間の少なかつたため同講座テキストの第 32, 33 頁が未講義のまゝに了つたことは遺憾でしたからこゝに吉野講師を煩はして誌上放送を行ふことになりました。これからすぐ講義が始まります。

[講師] エ、私はこゝに JEI のエス講座の擔任講師として JOAK テキスト第 32, 第 33 頁の講義を致します。こゝに講義致します一文はポーランドの文豪エリザ・オルゼシエコ女史の傑作『Marta』の一節でこのエス文は我敬愛するエス語の創案者ザメンホフ博士の流麗な譯筆になるものでございます。とにかく申分のない立派な作品であります。最近我熱心な同志の一人清見陸郎氏がこのエスペラント譯「Marta」から日本語に翻譯して改造社から出版され(書名は『寡婦マルタ』)としてある。エス譯書と日本語と對照して研究されたらよいと思ひます。) 大好評を博してゐるさうです。

扱一節宛本文をよんで譯してゆきませう。

Marta naskiĝis en nobela
bieno ne tre luksa kaj riĉa,
sed bela kaj komforta....

【譯】 マルタは大して華美でも裕福(ne tre luksa kaj riĉa) でもないが併し美しい氣持のよい(sed bela...) 貴族の(nobela) 莊園に生れ(naskiĝi) ました。(中略)

Super la lulilo de Marta
sekve kantis najtingaloj kaj
maljunaj tilioj balancis siajn
seriozajn fruntojn, rozoj floris
kaj tritikaj spikoj rulis
ondojn da oro. Kliniĝadis
super ĝi ankaŭ la bela viza-
ĝo de la patrino kaj per

varmegaj kisoj kovradis la
nigrharan kapeton de la in-
fano.

【譯】 從つて(sekve) マルタの搖籃(lulilo)の上には鶯が歌ひ老いた菩提樹(tilio)がそのまじめな(serioza) 額(額)をゆすぶつてなりました、そして薔薇が花さき小麥の穂(tritikaj spikoj) が黄金の波を波うたせてゐました。その搖籃(ĝi=lulilo)の上には亦母親の美しい顔がのぞいてゐて(kliniĝi かむ) 温い接吻を以て子供の黒髪の頭をおほひつゝむことが屢々でありました。

【註】 この ruli とはころがす意味です。ondo da oro は波なす黄金の意味です。kliniĝadis 及び kovradis は兩方とも ad といふ接尾字がついてゐますが ad といふ接尾字は一つの動作の繼續を意味する外に同じ動作が習慣的に屢々繰りかへされることを意味します。こゝは後者の意味です。

La patrino de Marta estis
virino bona kaj bela, la pat-
ro estis homo klera kaj an-
kaŭ bona. La sola infano
de tiuj gepatroj kreskis meze
de amo de homoj kaj de
karesoj de bonstato.

【譯】 マルタの母親は氣立のよい又美しい女でありました。父親は賢しくつて又氣立のよい人でした。この兩親の間に生れた一人子(たる彼女)は人々の愛と好境遇の抱擁の中に(meze de) 成人してゆきました。

【註】 kareso de bonstato はよい境遇の抱愛の中につゝまれてゐることでつまり浮世の波風にあたらず何の苦しみもしらない好境遇の中に成長したことです。

La unua doloro, kiu trafis
la ĝis tiam sennuban vivon

de la bela, gaja kaj vigla knabino, estis la perdo de la patrino. Marta havis tiam la aĝon de dek ses jaroj, si malesperis iom da tempo, si sopiris longe, sed la juneco metis sanigan balzamon sur la unuan vundon de sia koro, ruĝo refloris sur sia vizaĝo, la gajeco, esperoj kaj revoj revenis.

【譯】 其時まで (ĝis tiam) 曇りのなかつた此の美しい快活な活潑な女の子の生活にぶつかつた最初の傷手は母のなくなつたことでありました。マルタはその時十六歳でした。彼女は暫しの間失望し長い間あこがれてゐましたが併し彼女の若さが彼女の最初の心の傷をなほす藥 (san'ig'a balzamo) でありました。彼女の頬には再び赤味がよみがへりました快活さ、希望、夢想が歸つてきました。

【註】 sen'nuba は雲のないつまり曇りのない意味です。sopiris 母をあこがれてゐたこと。la juneco metis sanigan... 彼女が年が若かつたので何時の間にかこの悲しみを忘れてしまつたの意です。balzamo は傷につける藥。

Tamen baldaŭ venis aliaj malfeliĉoj. La patro de Marta, parte pro sia propra nesingardeco, sed precipe kaŭze de ekonomiaj ŝanĝoj enfalis en danĝeron perdi sian posedaĵon. Lia sano ekŝanceliĝis, li antaŭvidis ne sole la ruinon de sia havo, sed ankaŭ la proksiman finon de sia vivo. Tamen la sorto de Marta tiam ŝajnis jam asekurita. Ŝi amis kaj estis amata.

【譯】 しかしやがてまた外の不幸がやつてきました。マルタの父親は一部分 (parte) は自分自らの不注意 (ne'sin'gard'ec'o) からだが特に經濟的の變動の結果 (kaŭze de の原因のために) 自分の所有物を失ふといふ危険にはまりこみました。彼の健康は動搖しました。彼は彼の財産 (havo) の消失のみならず (ne sole) 亦 (sed ankaŭ) 彼の生命の近き終末をも豫見 (antaŭ'vidi) しました。併しその時マルタの運命は既に保證されて (asekur'it'a) ある様に見えました (ŝajnis)。即ち彼女は愛し (amis) 又愛されて (estis amata) になりました。

【註】 ne'sin'gard'ec'o 自分自身をかばふことをしないこと。kaŭze de ... のために。perdi sian posedaĵon は danĝero の説明。

Johano Swicki, juna oficisto, kiu havis jam sufiĉe altan oficon en unu el la regnaj institucioj en Varsovio, ekamis la belan nigrokulan fraŭlinon kaj vekis en si reciprokan senton de estimo kaj amo. Kelke da semajnoj post la edziĝa festo de Marta mortis ŝia patro.

【譯】 ヨハノスウィツキ——既にワルシャワの官廳の一つでかなり (sufiĉe) 高い官職についてゐた若い官吏 (ofic'ist'o)——がこの美しい黒眼の令嬢を戀しました。そして彼女の心に (en ŝi) これに答へる尊敬と愛の相互的感情をよびさしました。マルタの結婚式の後數週間たつて彼女の父親は死にました。

【註】 vekis en ŝi ... Swicki の愛に對して相愛の感じを彼女の心によびさしました。

これで Marta の講義が終りました。この戀を得たマルタもやがて大不幸におそはれて一朝にして世の荒波の中へほふりだされてさまざまの艱難辛苦の後遂に馬車の車輪の錆となるまでのあはれな物語りはぜひ博士の Marta でお読み下さい。時間がございませんからこれで今日の講義を終ります。

[Anoncisto] 吉野先生の御講義は終りました。これで今晚の放送はおはりました。

J-E-I, J-E-I。

EL MIA LERNEJA VIVO

註 譯『私の學校時代』

盲人エスペランチスト Vasilij Eroŝenko 君の原作。(『エスペラント中等讀本』
p. 40-43)

Mi blindiĝis, kiam mi estis kvar-jara. Kun larmoj kaj plendoj mi forlasis la regnon de l' belaj koloroj, de l' brila sunlumo. Ĉu tio ĉi estis por mi bono aŭ malbono, mi ankoraŭ ne scias.

私が盲ひた (blind'igis) のは私の四歳の時でありました (kiam)。涙を流し不幸をかこち乍ら私は美しい色彩の國、輝しい陽の國を去つたのです。このことは私にとつて幸であつたか又は不幸であつたか、私にはいまだに (ankoraŭ) わかりませぬ。

Li estas tridek-jara.
Li havas tridek jarojn.
Li havas aĝon de 30 jaroj.
彼は三十歳です。

Kun brilo en la okuloj, li turnis sin al mi.
目を輝かせてふり向いた。
Kun rideto (=Ridetante) li respondis al mi.
ほゝえみ乍ら答へた。
lando (地理學上の) 國、土地。
regno (君主の支配下にある) 國、國家;
regnestro 君主。

La nokto daŭras longe kaj por mi daŭros ĝis kiam mi spiros la lastan spiron. Sed, ĉu mi malbenas ĝin? Ne, certe ne. La fama blinda aŭtoro Hawks en sia „The Hitting of the Dark Trail“ diras: „La suno en tagmezo montris la mondon kaj ĉiujn ĝiajn mirindaĵojn, sed la nokto montris al mi la universon, la sen-nombrajn stelojn kaj senliman spacon, la vastecon kaj mirindecon de la tuta vivo; la perfekta tago montris al mi nur la homan mondon, sed la nokto montris al mi la Dian universon. Kvankam la nokto alportis al mi doloron, tre ofte malkuraĝigon,

tamen en ĝi mi aŭdis la stelojn kantantajn kune, kaj lernis scii la naturon kaj tra la naturo vidi la Dion de la naturo.

夜は永く續く、しかも私にとつては最後のいきを引きさるまで (ĝis kiam=ĝis) 續くことでありませう。然し私はそれを呪ふて居るでせうか。いゝえ、正にそんなことはありませぬ。有名な盲人著作家ホオクスは其著『暗路をたどりて』の中にこう云ふて居る:『眞晝 (tag'mezo) の太陽は此の世界とそのあらゆる不思議な (mir'ind'aj'ojn) を見せてくれた、然し夜は私に宇宙、無數の (sen'nombrajn) 星や無限の (sen'liman) 空間、人の全生涯の廣漠と不可思議さを私に見せてくれました。無缺の晝は私にたゞ人間の世しか見せてくれなかつた (nur) のですのに夜は私に神の宇宙を見させてくれたのでした。夜は私になやみ (痛み) や、度々失意を齎らしはしましたもの、(Kvankam)、またその夜の裡には星の合唱してゐるのを (kant'antajn kun'e) 聞いたのでありました、そして自然を知り又自然を通して自然の神を見ることを學んだのでありました』と。

Lia parolado ankoraŭ daŭris.
彼の演説はなほも續いた。
Li daŭrigis la paroladon.
演説をつゞけた。
La pluvo ĉesis. 雨が止んだ。
La infano ĉesis petoli.
子供はないたをしなくなつた。
La patro ĉesigis lin petoli=lian petoladon.
いたづらを止めさせた。
vasta (面積の) 廣い。
largha (幅の) 廣い。
doloro (傷や打ちみの) 痛み、(身の) くるしみ、(心の痛みの) なやみ (=kor'doloro)。
ĉagreno (いやな目にあふ) 悩み、閉口、こまること。

Tiel diras S-ro Hawks, kiu perdis

unu piedon, kiam li estis malgranda knabo kaj kiu blindiĝis, kiam li estis dekkvin-jara; per siaj rakontoj el vivoj de bestoj li fariĝis unu el la plej famaj natursciencistoj de Ameriko. Ĉu mi povas diri la saman? Se mi vivus kiel S-ro Hawks inter la arbaroj en komforta belega domo ĉirkaŭita de multaj familianoj, eble tiam mi ankoraŭ povus diri tion ĉi, sed sopirante ĉiam pri naturo mi devis ĉiam vivi en la bruego de tiaj urbegoj kiel Moskvo, Londono, Tokio, k. t. p.

小さい子供の時に一脚を失ひ十五歳にして盲しひたホオクス氏はこう云つてゐる。禽獣の生活の物語をかいて (per) 彼はアメリカの最も有名な自然科学者 (natur'scienc'istoj) の一人になつた (far'igis)。私も同じことが云へるだらうか。若し私がホオクスの様に森の間の住み心地のよい (komforta) 華麗な家に多くの家族に取りかこまれて (ĉirkaŭ'ita) 住んでゐたならば多分 (eble) そんなら (其時には tiam) 私もこんなことが云へるかも知れない、然しいつも自然にあこがれて (sopir'ante pri) 私はいつもモスクワ、ロンドン、東京など (k. t. p. = kaj tiel plu) のような大都會の喧囂の中に住まねばならなかつた。

{ skatolo el papero.

紙で(紙を材料にして)作つた箱。

{ rakonto el la vivo en Afriko.

アフリカ生活の(を題材とした)物語。

{ familio 家族(全體)。

{ familiano 家族(の一人)。

{ sono 音、音響。

{ bruo 噪音、(やかましい)響。

En bruego de tiuj ĉi urboj la noktoto ne igis min aŭdi la stelojn kantantajn kune, ĝi ne instruis al mi tra la naturo scii la Dion. Ĝi instruis al mi tute alion, sed pri tio mi nun ne parolos, mi rakontos nun pri tio, kion oni instruis al mi en la lernejo.

此等の都會の喧囂の中では夜は私をして星が合唱するのを聞かしめませんでした、自然

を通して神を知ることを私に教へませんでした。夜が私に教へてくれたのは全の他の事でありました、然しその事に就て今お話はいたしません、唯人が私に學校で教へてくれた事に就てお話しするに止めます。

Kiam mi estis naŭ-jara, oni sendis min al Moskvo por lerni ion en la blindula lernejo. La lernejo estis fermita for de la mondo, la lernantoj estis permesitaj nek eliri ĝin por siaj aferoj nek iri eĉ gepatrajn hejmojn dum libertempo. Ni ĉiam estis sub la kontrolo de instruistoj.

私が九歳になつた時盲學校 (blind'ula lern'ejo) で何か學ばせようと云ふので (por lerni) モスクワに送られました。此の學校は世間とはかけはなして (for de) 閉ざしてありました。生徒たちは用事に (por siaj aferoj) 出する (el'iri ĝin) ことも、休暇 (liber'tempo) 中に兩親の家に行く事も許されません。吾々はいつも先生の監督の下にありました。

{ liber'tempo 休暇。

{ (nacia) festo'tago 祭日。

La instruistoj instruis al ni, ke la tero estas granda kaj multaj homoj ankoraŭ povas trovi lokon por vivi sur ĝi. Nia amiko Lapin demandis: „Se la tero estas granda, kial do mia patro neniel povas havi eĉ malgrandan pecon da ĝi por kulturi kaj ĉiam devas lui ĝin de Grafo Orlof?“ La instruisto punis lin pro la mal-saĝa demando; en nia leciono ni povis demandi al nia instruisto nur saĝajn demandojn.

先生が吾々に地球は大きくてなほ多くの人がある上に住む場所を見出すことが出来ることを教へました。すると吾が友ラピンは質問して曰く:『もし地球が大きいなら、なぜ私のお父さんはどうしても猫の額ほどの耕す土地をも持つ事が出来ずいつもオルロフ伯から土地を借りなければならぬのでせう』先生は馬鹿な質問をしたとて彼を罰しました; 私たちの授業中賢い質問でなければすることは出来ないのです。

{ Ĉu vi ne havas skatolon por enmeti (en ĝin) tiujn plumojn?

{ 此のペンを入れる箱がありませんか。

{ pec'eto da tero 狭い土地。

La Faraono

【泰西エス文藝梗概紹介】

[5]

曾 根 一 郎

77. Herhol は密偵として、Eünana を Ramzes の近衛の將校に入り込ませた。Mefres は Likon をかくして何をして居るであらうか。即位後幾月も経たぬ間に Ramzes は氣分が變ださ云ふ噂が全國民の耳から耳へひそひそと傳へられて居る。然も母后 Nikotlis 自身が此事を目撃した一人であるといふのだ。

78. Ramzes の従弟で且近衛の大將たる Tutmozis は州知事 Antef の娘 Hebron と結婚する。彼は Hebron が決して自分を愛して居ないことを知りながら、そのみならず Hebron が Ramzes をおもつて居ることを承知の上で結婚する。彼の目的は最初から彼女の持参金をねらつて居たのである。

79. Tutmozis 夫妻は結婚後 Ramzes から與へられた宮殿内の一つの御殿に住んで居る。然し Tutmozis は殆んど妻とは路傍の人の様な態度で暮して居る。Ramzes は Tutmozis を呼び寄せて、自分の留守中の宿直を頼んでおき、他事にかこつけては Hebron と密會する。是等の秘事は勿論 pastraro の手に細大もらさず spioni されて居る。

80. 貴族階級と僧侶階級の争は愈々明白になり、深刻になり、辛辣になつて行く。Mefres は Likon に催眠術をかけて Ramzes の宮殿に入りこませ、裸體になつて夜の庭をかけまはらせる。それがために若い Faraono は氣が狂ひ出したとの噂が、全國にひろまる。或夜は皇太后 Nikotlis 自身が裸體の Likon に會つて、我が子 Ramzes と思ひあやまり、非常な恐怖と不安におののきながら、Tutmozis をよんで相談する。Tutmozis は決してそんな馬鹿なことはないさ斷言はしたが、さてしかし彼の心の中では、Ramzes が自分に留守番をさせて出かけた先では果してそんな狂氣じみたことをして居るのかどうか、彼自身も不安になるが、然し多分は Mefres の奸策だらうと推測して Mefres と一緒に王子殺害事件に立あつた高僧 Sem を通じて警告を發する。それが爲めに Mefres もその奸策をひつこめねばならなくなる。然し彼はそれ位でへこたれはしない。

81. Pentuel は人民代表者會議の代表者を選定の命を受けて出張の途中 Memfis 市に近く Piramidoj と Slinkso の北にあたる一つ

の荒れはてた寺に、老僧 Menes をたづねる。Menes はまるで乞食の様な恰好をして居るが Egipto 最大の astoronomo であつて、日蝕を豫知し、地球の大きさを測定し、蒸汽の偉力を發見し、三角測量をあみ出し、その他色々の…要するに當時最高の科學者である。此科學者の學問を信用しなかつたために Ramzes は取かへしのつかぬ誤算をして身の破滅を招き、Herhol は Menes の學問の權威を認めた結果乾坤一擲の大冒險に成功して最後の勝利を得ることが出来たのである。(それは最後に出て来る)。

82. 國民の各階級から選出した代表者會議の大勢は無論 Ramzes に有利であつた。Ramzes は宮廷の寶庫の窮乏、軍備充實の必要、人民の疲弊救済の理由をあげて、Labirinto から或る金額を持ち出すことを要求する。然し賛否投票の結果に於いては否とする pastraro の投票が 8 票もあつたので、一人の反對者があつても開くことの出来ない規定になつて居る Labirinto の富は遂に合法的には一指も觸れることが出来なくなつた。然しさうと決定したらさぞ悲觀するだらうと思はれた若き王者の顔には、却つて満足の色が現はれて居るので、Pastraro は Ramzes が非合法的手段を敢行せんとする意思のあることを見てゐる。Rames は國民の大多數が自分を支持して呉れるなら Pastraro 何ぞ恐るるに足らんと樂觀して機を觀て彼等の頭上に鐵槌を下さうとする。

83. Ramzes は怪僧 Samentu に命じて、Labirinto の富をぬすみ出させ、一面に於ては pastraro の罪跡を追求し糺弾しやうと苦心して、Hiram をして Herhol 等の秘密條約の文書を手に入れるために努力せしめる。つまり戦の名分を立てやうとして居るのである。ところが一方では pastraro も大勢の我に非なるを見て、秘かに結社を作つて Ramzes と死闘の作戰を練る。

83. Mefres は Likon の透視の能力を利用し(そんな時には何時でも例の kristala globo で催眠させる)て、Samentu が Labirinto にしのび込んで居るところを發見する。怪僧 Samentu は萬一の際の用意にさ懷中して居た毒をあふいで其場で自決する。

85. Ramzes の方では何月何日愈々僧侶と戦ひ一舉にして彼等を屈服させやうと計畫する。それは Hiram が Pastraro の罪跡の證據品を握つて歸つてからと云ふことになつて居た。ところが深謀遠慮の Herhol のために彼の術中におちいつて、その反問苦肉の策にまんまとのせられてしまふ。

86. Herhol はかれて Menes から報告を受けて居た日蝕の現象を利用しやうとして、其日を以て Ramzes の一派に寺院襲撃の暴舉を敢行せしめる様にしむける。Ramzes は此の Herhol の奸策は夢にも知らずに、彼自身獨立に寺院襲撃の日取り變更を決定する。それは彼の周圍の事情が自然さうさせたやうに見えるが、その周圍の事情は實は Herhol の反問苦肉の策によつてさうなつて居たのである。

87. 全國は僧侶派と Ramzes 派の二つに分れ、物情騒然大事は將に迫らんとして居る。何月何日 Ramzes 派の暴徒は寺院を襲撃する。Herhol は暴徒を慰撫しやうとする。然し暴徒はきゝ容れずに、門を破つて亂入しやうとする。そこで Herhol は仕方なく神に訴へる。すると晝が忽ちに夜になる。暴徒は此の偉大なる神通力に恐怖し、悲鳴をあげて救ひを求める。時刻をはかつて Herhol は神のお許しを願つてやる。すると夜は忽ちにして再び晝となる。此の混亂の間に多くの死傷者が出來、それに對して寺院の方からは手厚くいたはつてやつたので、威嚇と慰撫との巧妙な手段によつて Ramzes 派はすっかり骨ぬきになつてしまふ。のみならず却つて從來の不信心をすて急に寺院と僧侶とを恐れ敬ふやうにさえたつた。

88. Ramzes の方ではその日の暴徒の寺院襲撃の時刻がかれての計畫通りに行はれないのでいらいらする。そこへ母后 Nikotlis が來て絶えず差出口をする。Hiram は Herhol 等の密書を手に入れてかけつける。Pentuel がかけつけて、士氣沮喪をふせぐために日蝕のあることを、急ぎ諸兵に警告せしめる。Ramzes は此時はじめて、學問の偉力を痛感する。此變事が何となしに凶徴に感じられて居るところへ、Memfis の様子を見にやつたものはなかなか歸つて來ぬ。やがて暴徒が神怒にふれて恐怖し、屈服した報が來る。更に Samentu が Likon と Mefres のために Labirinto の中で發見されて自ら毒をあふいだ報告が來る。Hiram の口から、Mefres が

れて Likon をつかつて Ramzes が氣が狂ひ出した噂を立てさした事を素破ぬかれ（此事だけは堅く Ramzes の耳に入れないやうに秘密にされ居た）て、怒心頭に發して居た Ramzes は、Samentu の自決の報に遂に最後の決意をする。母后 Nikotlis のいさめをきゝ入れずに、Tutmozis をして Herhol, Mefres 等を逮捕せしむべく Memfis につかはす。Hiram の手に入れて來た密書だけでも彼等の罪の證據は十分である。

89. 寺院では秘密の會議が行はれて居る。Herhol はあくまで Ramzes の生命をたすけ、たゞその意思だけを屈服せしめやうと主張する。然し Mefres は此際やつつけてしまひたがつて居る。

90. Tutmozis は勇敢に寺院に進んで Herhol を捕へんとする瞬間に、服心の部下と信じて居た Eūnana のため戦斧で其場に切り倒されてしまふ。Eūnana は言ふまでもなく、Herhol の手下で spiono として Tutmozis の部下に入り込んで居たものである。

91. Mefres は Likon を使つて Ramzes 暗殺の決意を實行する。Likon は夢遊状態で Ramzes の宮居内に忍び込む。丁度 Ramzes は計畫のそごしたことに業を煮やして居たがいきぬきに Hebron の所へ密會に行く。その歸途に Likon のために短劍を脇腹につきさゝれる。Likon は Ramzes のためになぐりこるされる。負傷した Ramzes は兵をひきいて自ら寺院にせめかけやうとするが、遂に其意を果さないで息絶えてしまふ。Mefres は Labirinto の番兵のために暗殺される。

92. Herhol は遂に最後の勝利者として、母后 Nikotlis と結婚し、自ら Faraono の位に即く。そして一人の反對者もなく Labirinto の寶を持ち出して、危機を救ふことが出來た。Pentuel は政治上のことにすっかり愛想をつかして、官位をみかぎり、Menes について學問に生きやうと決意する。（梗概完）

* * * *

以上をもつて La Faraono 上中下三卷の極く荒筋だけは書き終へた。しかし、最初におこしはりした通り、これはほんとの覺え書きにすぎない。たゞごんなことがかいてあるかを、覺書きにとつて見たにすぎない。従つて La Faraono のほんとの面白味をつたへるさいふことは最初から目標が違つて居たのである。次號にはその文章の見本として、面白い epizodo を一つだけ對譯に見たい。

華の巴里にて

小坂 狷 二

四月十三日。長谷川君十一時頃ホテルへ来てくれタクシーでブローニュの森を散歩。オートイユから川蒸気船にのつてホテル・デ・ヴキユまでセイヌ河を航し、ノートルダム寺院の塔へ登る。地下鐵で大本の西村光月氏方へゆく。一緒にリュクザンブール公園をぬけて醫學校街の支那料理にゆく。岡田要氏及び九大の江崎氏に遇ふ。江崎氏は遺憾乍ら本年のエス萬國大會へは出席出来ぬ由。二十時頃誰も行くなるサントアポリヌ街の二十五番へ見物にゆき、ご膳をぬかれる。二十一時 Verda Kato の會合へゆく。會頭 Le Corneq 及びその娘の Jeannet、副會頭の Dubois、國際ラヂオ誌の Eisberg (ロシア人)、Marchand 氏、獨逸の何さか青年などが來てゐる。會合はカフェーの一隅でやつてゐるのだがビール一杯位で三四時間頑張つて話してゐる。一時頃カフェーを出て地下鐵にやつき間に合つてホテルへかへる。

十四日。長谷川君ミルブル宮見物。何分すばらしく大きいものゝてやつき一翼だけすませたに過ぎない。マデレーヌ院の處から所謂 Granda Bulvarado を歩く。この大通は夜間は例の inoj がズロズロ strati するそうだ。夕 Cafe Sorbonne へ行つたら Grenkamp とブリヴァー第一夫人が來てゐた。eks-夫人は中々よくエス語が話せる。グレンキヤムプは吾輩が嘗て逢つたエスペランチストの中では正に第一人者と云つていい。ブリヴァー前夫人は先にかへり三人で二十四時ごろまで飲んで話す。

十五日。長谷川君とその友人たちの下宿へゆく。お醫者さんの中島氏、長谷川同様、京城帝大の先生戸澤、藤田氏等にあふ。戸澤君は小供の時分横須賀の吾輩の隣の家へよく夏休みに來たことがある。約二十年振りであつたわけ。更にその後ベルリンでも一緒になつて、エスペラントを實地必要上から始められた。それはあまの話。

夕、長谷川君の下宿たる Lanty のさこへゆく。ランテイーは S.A.T. の Sennaciulo の編輯長で、吾輩の想像とはまるでちがつてお

さなし相な老人である。尤も年はそれほどではない。Sennaciulo の編輯を一人でやつてゐるこゝさて目がみえなくなる位も働くことがある位の奮闘家である。勿論無俸給で働いてゐるのだ。家政は印度生れの英婦人 kamara-dino リムーザンがやつてゐる。ランテイーは英語がわからない。従つて長谷川も朝から晩までエスペラントでやつてゐるわけである。

ロンドンの鐵道省事務所の徳永技師からロンドンの日本人會でやるエスペラント講演會は十八日以後ならいつでもよいと云ふ手紙が來たので二十三日に英國へ行くことにする。

十六日。長谷川君の案内で Petit Palais 見物。よい美術館。夕、支那料理に行つて食事を了つた所に Jan Kostecki (ポーランド人) と R. Arnould (ルーマニア人) とがやつて來た。非常な込み方なので席がない。そこで日本料理を食つてみないかささそつてタクシーでトキヨに行き夕食を御馳走する。夕食後グランドルメーのカフェーで二十四時半ごろまで飲んで話す。

十七日(日曜日)。長谷川、戸澤、中島君と共にヴェルサイユにゆく。夕、パリーへかへつて中華飯店で夕食をしてゐたら元學會々員蠟山政道氏にあふ。

十九日。夜 Cafe Sorbonne で飲んでゐたら西村氏及び Djudjei が來る。バスでモンマルトルに行つてバルタバラン (Bal Tabarin) に行く。大きな kabaredo である。

二十日。午後長谷川君とグレンキヤムプの下宿をしてゐるホテルへ行く。グレン先生は昔は金持ちの坊ちやんだつたので、その時分しこたまエスペラントの本を買ひ込んで故郷ポーランドヤスローの家にも、又このパリーの假寓にも本を山ほど持つてゐる。東京エスペラント文庫になさそうなのをえらんで約三百フラン程買ひ上げてやる。三人で中華飯店で夕食しタクシーで Verda Kato の會合へゆく。獨逸少年の K. Bujakovski と云ふのが來て居たが中々流暢に話す。明後日日本食へ招待する。例により二十四時まで飲んで話す。

二十一日。Hotel des Invalid (軍事博物館) 見物。Djudjef の下宿 (西村氏と同じ家) へゆき西村氏を訪ひ共に Rus-Kaukaza restracio へゆき夕食。一緒に H. L. Follin 氏方にゆき獨逸エスペラント協會々頭の D-ro Kliemke 氏にあふ。同氏には昨年フキラデルフキアの米國エスペラント大會であつてゐる。Follin 氏は Internacia Respubliko 運動の牛耳をさつて居り、明日その會合で Winkel さ云ふ男が Esperanto 反對の講演をやることになつてゐる。丁度その男が來あはせたので Djudjef さしきりに渡りあふ。二十一時長谷川と Kostecki 方へゆく。Testamento de Verda Kato を以て一舉に humora poeto として世界に名をあげた Reymond Schwartz も來てゐる。菓子や酒を盛んにすゝめられる。二十三時半ごろ一緒に外へ出てサンミツシエル街に出る。獨逸少年の Bujakowski 及び Frankfurter Zeitung の記者 Werner Jantschge に出あひ、またカフェーへしけこみ、終に地下鐵がなくなつたのでタクシーでホテルへかへる。

二十二日。晝 Eiffel 塔にのぼる。二十時半 Sorbonne 大學の地學大講堂で催されるパリーエスペラント會の例會へゆく。今夕はグレンキヤムブが Pola folkloro の講演をする事になつてゐたが風邪で聲が出ないから吾輩に何かやれと云ふので約四十分程一席辯じる。二十二時散會後ゾロゾロと近くの Cafe Cluny になだれ込み一角を占領して飲む。一時過ぎて Metro (地下鐵のこと) がなくなり、タクシーでホテルへかへる。

二十三日。朝、北部鐵道停車場 (Gare de Nord) へゆく、長谷川、戸澤、中島三氏來り十時發車。十三時半カレー着。少し遅れて出帆、浪荒く、こそこそく閉口する。十八時半ロンドン Victoria 停車場着。『常盤』で夕食、長谷川と共に Esperantista Laborista Grupo の會合に出席。約五十人出席あり、活氣が溢れて居り中々盛んなものである。

二十五日。長谷川君と共に商務官事務所にゆき竹内徳治君にあふ。日本財界の恐慌の報あり、且つ我が學會の基金が村井銀行にあづけてあると思ひ込んでゐたので大に心配して色々話をきく。辭して Brita Esp.-Asocio へゆき日本人會で講演の日に Butler か Goldsmith 氏に本やチラシを持つて來て五分か十分程話をしてもらふことを頼む。

二十九日。二十時から日本人會に於けるエスペラント講演。

エスペラントさは何ぞや	小坂
歐洲に於ける現状	長谷川
London に於ける運動	Butler

吾輩は約一時間四十分。長谷川二十分。Butler 五分程しやべる。但しあいにく本日は新しい天長節であつたのを當方も日本人會側も忘れてゐて催し、日本の多くの institucioj は休みであつたので聴衆は約二十人であつた。

五月一日。長谷川と共にその友人清宮氏 (矢張京城帝大の先生) の下宿へゆき戸澤氏、相馬氏 (Eroŝenko が御厄介になつてゐた中村屋の御子息) 等と共にチャーリングクロススの橋畔にゆく。今日は May day である。Espe antistoj-laboristoj の連中が集まつて來る。赤い地に白丸をぬきそれに綠星をつけた旗を押し立て行列に加はる。吾々日本人八人も同じ様な小旗を帽に挿して同勢に加はる。行列は長蛇の如く Oxford Street へ出てハイドパーク (Hyde Park) へくり込む。各所に荷車を置いてそれを演壇にして演説が始まる。エス連は Platform 6 を取りかこむ。外の辯士の熱辯があり、最後に K-do Sheriff 氏がスコットランド辯でやたらに r の音をひゞかせて Esp. に就てしやべる。

四日。長谷川と英エス協會へゆき……十三時 Victoria 停車場へゆく。Folkston-Boulongne 航路で游峽を渡る。少し曇つてゐたが海は靜か。第一回萬國大會—世界エスペランチストの第一の感激の舞臺 Boulongne sur Mer の美しい町が水に浮んで見える。なつかしい感じが胸にわく。二十時五十五分パリー歸着。

六日(金)。夕、ソルボンヌ大學に於けるエスペラント例會。今日は Newton の特別 vespero である。吾輩も引つぱり出されたので Newton, Leibniz, 關弘和と云ふ三題話みたいな話をやり和算のえらい所を紹介する。

八日(日)。朝 Rodolf (ブルガリア人) と Jougnot (フランス人) さが來る。二人とドレスアップして固くなつてやつて來たのに面喰ふ。長谷川君も來たので四人で巴里の西北にある大きな森林公園 Bois de St. Germain にゆく。Teraso に立つて望めばセイヌの河が帶の様に美しくうねつて居り、遙かにパリーの町が夢の様に霞んでゐる。夕、パリーへかへり、トキワへ兩君を案内して日本食の御馳走をする。Rodolf は可成り Esp. がしやべれるが Jougnot は全くの初學者。

和文エス 譯添削欄

〔第五回〕

編輯部

問 1. 少年は二錢拂つて (por) 菓子を買ひ求めた。

答 1. La knabo aĉetis kukojn por du senoj.

概してよく出来てゐましたが por の用法を誤つて aĉetis por kukoj... としたのが二三ありました。尙 aĉeti の代りに preni 又は pagi を用ひた方も大分ありましたが、preni は幾分 anglicisma な嫌がないでもありません。pagi は金錢を支拂ふ行爲を指すのですから、買ひ求めると云ふ意味とは多少違つて來ます。por を交換の意味に用ふることは上例の如くですが Zam. は kontraŭ をも por と同じ様に交換の意味に用ひてゐます。従つて次の様に云ふ事も出來ます。La knabo aĉetis kukojn kontraŭ du senoj.

問 2. 向ふへ行つていろ、でないと横面(頬)を張るよ。

答 2. Iru for, alie mi vin batos sur la vango.

此種の語調の烈しい文は成可く其氣持を出す様に譯されなければなりません。向ふへ行けには Foriru, forestu, estu for... 等種々譯し方がありますが For! だけでも充分語氣が現はれて面白いと思ひます。でないとには随分悠長な譯がありましたが(例:—se vi ne volas foriri, se vi ne estas tiel 等等)これも簡単に se ne, さか alie と譯さなければ怒氣がぬけてしまひます。尙 aŭ を用ひた方が目立つて多かつた様ですが、これも anglicisma で感心しません。bati に對して frapi を用ひた方もありましたが frapi は叩くに當る字で、なぐる意味にはなりません。

問 3. 彼は何もかも知つてゐる様な口をきく。

答 3. Li parolas, kvazaŭ li scias ĉion.

恰もを相變らず as if の直譯 kiel se を用ひる方がありますが、御注意下さい。又 paroli の代りに diri を用ひた方が數人ありましたが diras には通常直接又は間接の目的を要するので此文例の場合に用ふる様な diri 單獨の用法は感心しません。

問 4. 吾々は萬難を排して前進しよう。

答 4. Spite de ĉiuj malhelpoj, ni marŝu antaŭen.

一番多かつた答案は Spite de ĉiaj malfacilaĵoj, ni marŝos antaŭen. これでも結構ですが此場合の前進しようは意志を示すので決して單なる未來に於ける行動を示すものではありません。従つて單なる未來の行動を示す marŝos よりも、強固な意志を示す間接命令的用法 ni marŝu の方が當つてゐる言はれなければなりません。萬難は如何様にでも譯されます。ĉiaj baroj, ĉiuj malhelpoj, ĉiaj malfacilaĵoj 等々。尙 Spite de の次に目的格を用ひた方が二三あつた様ですが、前置詞の後には通例主格の語が來ると云ふ原則を忽にした用法です。

問 5. 其事に就きましては、只今御話し致します。

答 5. Rilate al tio, mi nun parolas.

…に就いての譯に rilate al 又は koncerne al を用ひて戴きたかつたのですが大多數が pri を用ひて pri tio, … とされた様でした。pri に比べて rilate al 又は koncerne al はズット重々しい感じがしますから、問5などにはシツクリ當嵌ります。Zam. の幾多の用例から考へると、rilate の場合には rilate al tio と前置詞を用ひ koncerne の場合には koncerne tion と目的格を餘計に用ひてゐる様です。尙 parolas を未來にして parolos としても差支へありません。

問 6. 御入用なだけ御取り下さい。

答 6. Volu preni, kiom vi bezonas. 場合によつては kiom vi volas でもよいがこゝでは bezonas の方が當つてゐる。

問 7. 生憎彼は留守でした。

答 7. Bedaŭrinde li forestis.

forestis の代りに ne estis hejme も結構。生憎を malbonŝance とされた方が非常に多かつたが、bedaŭrinde 又は dommage 等に比べると多少重苦しい感じが無いでもない。

問 8. 僕は未だエスペラントで思ふ事が言ひにくい。

答 8. Mi ankoraŭ malfacile esprimas min en Esperanto.

思ふ事を言ふは esprimi sin だけで充分その意味が現はれますから、強ひて esprimi sian ideon, penson, opinion ... とする必要はありません。のみならずこの様な目的語を附加した爲意味が非常に制限されて来ることになります。エスペラントでを esperante 又は en esperanto と小文字で書いた方が目立つ程多かった様ですが、Esperanto は固有名詞ですから必ず大文字を用ひねばなりません。

問 9. どうしたらよいのかわからぬのでお尋ねに上りました。

答 9. Ĉar mi ne sciis, kion fari, mi venis al vi por konsilo. (por peti konsilon)

此場合のお尋ねに上りましたは demandi の意味ではなく、por peti konsilon (助言を求める) の意味ですからその積りで譯されなければなりません。又 kion fari を kiel fari としても差支へありません。

問10. 何か面白い小説が読み度い

答10. Mi volus legi iun interesan novelon.

iun を ian とした方が大多数を占めてゐましたが、iun は一どれかの一と云ふ意味で、何か知ら面白い本をと云つた氣持です。ian は一或種の一と云ふ意味で、種類を指すことになります。従つて此場合には iun の方がしくくり原文に當嵌つてゐる様です。

問11. 歐洲では労働者でエスペラントを學ぶ者が多い。

答11. En Eŭropo multaj laboristoj lernas Esperanton.

概してよく出来てゐましたが此課題でも一番目に立つたのは、Esperanto を普通名詞として esperanto とされた方が大變多かつた事です。尙 multaj laboristoj lernas Esp. en Eŭropo. と云ふのがありましたがこれでは Eŭropo は lerni へかかり、ヨーロッパで學ぶと云ふ意味になりますから、laboristoj の次又は文首へ置くのが至當です。又 En Eŭropo, da laboristoj, kiuj lernas Esp. estas tre multe. も面白いと思ひます。

問12. 毎日段々寒くなります。

答12. Ĉiutage fariĝas pli kaj pli malvarme.

これも概して好成績でしたが Tagon post tago, pli kaj pli と同種の用法を重用された方が可成りありましたが、これは Tagon post tago pli malvarmiĝas 又は Ĉiu tage, pli kaj pli malvarmiĝas の孰れかにしたいものです。Paŝo post paŝo と云ふのもありましたがこれは、歩又歩、で此場合にはシツクリ當嵌りません。

問13. どうやら、こうやら暮しを立てゝゐます。

答13. Mi iel perlaboras mian vivon. (min vivtenas)

問14. 人々は互に愛し合ひ助け合はねばなりません。

答14. Homoj devas ami kaj helpi unu al la alia.

お互には unu la alian, al si reciproke 等何れでもよろしい。

問15. 彼は朝起きて見ると大層聲が哽れてむせぶ様な咳が出た。

答15. Vekiĝinte en la mateno, li ekrimarkis sian voĉon tre raŭka, kaj li sufoke tusadis.

二月課題 (締切 二月十五日)

1. 彼は狂氣の様に彼女を打擲した。
2. 彼があんなに天折しようとは思はなかつた。
3. 吾々の人類の爲に (pro la bono de) エスペラントを普及しませう。
4. 彼は全生涯をエスペラント運動の爲に捧げた。
5. 貴方の御盡方のお蔭で吾々は成功しました。
6. それは人間の力がよく及ぶ所ではありません。(人間の力では出来ないの意)
7. 實際の所、貴方は賛成なのですか、それとも不賛成なのですか。
8. 私は毎日五頁宛本を讀みます。
9. 假令失敗はしても、やるだけはやつて見よう。
10. 私はロンドンへ行く毎に彼に出會しました。

Zamenhof の著書より

[5]

松本清彦

(12) kelka の用法

kelk は元來不定の數量を示す字で、Kabe の Vortaro de Esp. によるさ、Nedifinita nombro (pli ol unu malpli ol dek); Nedifinita pronomo, esprimanta parton el tuto. 前者の例として Venis kelke da gastoj. 後者の例として Kelkaj homoj kredas, ke la vero ĉiam venkas が擧げてあります。扱て kelka の用例で最も多く見るものは、上例の如く kelkaj として kelk に純然たる數の觀念を與へたものと、kelke da として、個々の數に就いてではなく一團を云ふ量の觀念を與へたものとです。而し kelke da を用ふる場合でも、これに従屬する名詞が、例へば gastoj であるさか homoj さか云ふ様な量定し得る具體的な意味を有する場合には、量の概念より數の概念の方が強く頭に残る様です。然し (kelke da) gastoj, homoj 等の名詞が (kelka) tempo, malfacileco, embaraso, silento を抽象化されてゆくにつれ、kelka の意味も多少變つて來るわけです。次に引用しました Zam. の用例によつて kelka の適用範圍が非常に廣いこと且これがどんなに面白く用ひられてゐるかが分ります。

a) Ŝi opiniis, ke per glaso da lakto kaj per kelke da bulkoj ĉiutage ŝi povas dum kelka tempo sufiĉe subteni siajn fortojn.

(譯) 彼女は毎日牛乳を一杯にパンを幾切か食べてゐれば、暫くの間はそれで充分自分の力は保つことが出来ると考へた。(p. 70)

b) ...antaŭ unu semajno Evelino D. diris al mi, ke ŝi perdis unu el la plej utilaj komizoj de sia magazeno kaj troviĝas pro tio en kelka embaraso.

(譯) まだ一週間にはならない前の事です、エヴエリイナ D. が此頃店で腕利きの番頭にゐなくなられて少々困つてゐると申して居ました。(p. 87)

c) Ŝi eldiris post momento kun kelka malfacileco.

(譯) ちよつと間をおいてから彼女はやつさの事で云つた。(p. 87)

d) Por vi, ŝi diris post kelka silento, kaj por mi, pro pano, pro azilo, pro trankvileco mi laboros!

(譯) 「お前の爲にも、それから私の爲にも母さんは力の限り働きますよ、(パンを得る爲に、雨露をしのぐだけの家に住はれる様に、そして平穩な生活が送れる様に)」暫くすると彼女は決然たる調子で言つた。

尙 dum kelka tempo を云ふ様な意味で iom を用ひた例も見受けます。然し氣持の上では iom の方がずっと軽い様に思ひます。

Ne, ne, ne monon! mi iros ĝin akiri en la urbo! dume sidu iom ĉe mia malsana infano!

(譯) いゝえ、いゝえ、お金ちやございませぬ。それを取りに町まで行つて來たいと存じまして。その間暫らく病氣の子供の傍に附いてゐて頂けないでせうか。

(13) senti sin ĉe si

senti sin ĉe si は英語で云ふ to feel oneself at home に當る用法で、くつろいだ氣分になる、と云ふ場合に使はれてゐます。此種の用法は必ずしも英語に限つたわけでもない様ですから、エスペラントの senti sin ĉe si も Anglicisma な用法だとは云へますまい。

Jadvinjo tie ĉi jam sentis sin ĉe si kaj levante la belajn okulojn al la vizago de la estonta instruantino, kun serioza mieno alŝovis al la tablo oportunan brakseĝon, ...

(譯) ヤドビニヤはいかにも自分の領分へ入つたと云ひたげな様子を見せてその綺麗な眼を新しい先生の方へ向けるさ眞面目くさつた表情で手近にあつた腕椅子をテーブルの方へと寄せた。(p. 47)

(14)

ligadi kaj flikadi la rimedojn por vivo.

これは辛じて生計を維持してゆくさ云ふ事を面白く言ひ表はしたものです。尙 rimedo なる言葉は使ひ様によつて随分色々な場合に面白く用ひられてゐます。例へば rimedoj permesas aŭ ne permesas ~ can or cannot afford ~ する餘裕がある。又はない。の如きは其一です。(Fab. vol I. p. 40 参照)

a) Pasis ankoraŭ tro malmulte da tempo de tiu tago, kiam ŝi komencis ligadi kaj flikadi la rimedon por vivo simile al putranta ĉifono, kiu disŝiriĝas kaj disfalas en la mano;

(譯) 手の中でずだずだにちぎれ崩れて終ふ腐つた襤褸屑にも似た生活のつぎはぎ仕事を彼女が始め出した日から、時は未だごく僅かしか過ぎてゐなかつた。(p. 123)

單語記憶法

川崎直一

どれだけ覚えたら良いか?

Esp. の單語には oficiala と neoficiala の二種類がある。Oficiala とは Fundamento (1905 年第一回萬國大會で承認せられた Esp. の憲法、即ち 16-regula Gramatiko, Universala Vortaro, Ekzercaro から成る) にある單語と、Lingva Komitato (これも第一回大會で provizore に、第二回大會で definitive につくられた『エス語の基礎原理を保存しその正常な進化發達を監督する』委員會) が 1909, 1914, 1922 年の三回にわたつて認めた單語を指すのである。Lingva Komitato が決して天降りの今迄誰も使わなかつた novaj vortoj を一般に押しつけるのではない。Fidindaj aŭtoroj によつて試みられた novaĵoj が Esp-ista popolo によつて眞に necesaj であると認められて、その使用が一般化した時に始めて Lingva Komitato の投票によつてその oficialigo が決せられるのである。Oficialaj vortoj の總數は 4,000 を越えているが、その大部分は動植物その他の専門語である。『眞に普通語として暗記すべきものは 1,000 語内外ならん』と千布さんは大成エス和辭典の緒言で言つておられる。Cart, *Vortaro de la Oficialaj Radikoj* は radikoj の中で極めて必要なものを普通の字體で、それ程でないのは kursiva の字體で示してある。Kabe, *Vortaro de Esp.* (1910) もほぼ 4,000 語位だと思ふ。殆んど oficialaj vortoj ばかりである。(oficiala vorto でこれにないのは aeroplano, indukti, negro 等、neoficiala でこれにのつてゐるのは navigi, pomologo, pluskvamperfekto 等)。

我々は専門的著述や、極く止むを得ない必要の場合の外は neoficialaj vortoj を使つてはならない。Senpripense に kaprice に nova vorto を enkonduki すると Esp. は混亂してしまう。(参考: *Oficiala Klasika Libro* の Grosjean-Maupin の note)。

覚え方

1. カード法 *Verda Mondo* に連載中のものと、石黒、倉治、梶三氏の編輯中のものがある。立派なものではあるが未完である。讀書の時必要だと思つた單語を自分で karto にした方が爲めになる。

2. 語源法 特にギリシヤ、ラテン系の難かしい學術語の場合 Antropologio (人類學) を antropo- は人、-logio は學問と、又 amorfa (無晶形の) を a- は否定、-morfa は形のと分解しておけば、今度 antropomorfa という語に出會つた時には辭書をひかずともその意味を推量する事ができる。即ち antropologio の antropo (人) と amorfa の morfa (形の) だから、**人の形の**になる。mofologio (形態學) も何でもなくすぐ覚えられる。

3. 類音法 私は stipo (植、えにしだ) という難かしいやつを覚えているが、これに似た ŝtupo (丸太) と連絡をつけているからである。其他 mosto (ブドウ搾液)——moŝto.

4. 脚韻法 これは大阪の佐々木さんの考案、或時今年は丑 (bovo) の年だから -ovo で終つた單語を集めてみたといつて brovo, ovo, krovo 等あげられた。これも自分で辭書をくつて探した方が面白いが、面倒なれば Avoto, Rimvortaro という便利な本がある。これは詩を製造したい人のための (詩人のためではない) 脚韻集である。

〔例〕 orio で終つた單語はどれだけあるかと P. 9 の -orio のところを見ると alegorio, cikorio 等ずらりとならんでいる。

5. 類義語法 Sinonimo を集める事、Komenci に関して ek-, iniciati; komerco に関して afero, industrio, negoco 等を探す。手頃な参考書は Millidge のエス英辭典、Oriento—okcidento のような antonimo (反意語) を研究するのも面白いが Esp. では大抵 bela—malbela のように mal- で片付ける事ができる。

6. 分類法 例えば天候に關する單語 vento, pluvo, neĝo 等を全部拾つて見る。千布エス全程の終りには系統的に分類した單語表がある (参考: Marcel Bobin, *Les Mots Esperanto groupés selon le sens.*)。 (以下 64 頁へ續く)

つ み 菜 集

1. Zamenhof の揚音

„Zamenhof“ はどこに揚音して發音するのかと云ふ質疑に對して本誌だつたか或はその前身の *Japana Esperantisto* だつたかに『ポーランド語は殆んど除外なしにエスペラント同様最後から二番目の綴に揚音があるのだから多分 *Zaménhof* と揚音するのである』と應答した事があり、自分自身もそう發音してゐた。然しポーランドに行つて聞いてみたら最初の綴に揚音して *Zámenhof* と發音するのだと云ふ。まことにキョーシユクの至り。御承知の通り Zamenhof は polo ではなく hebreo であつた。

2. しやべること

エスペラントをしやべるのは矢張りスラヴ人に一番うまい人が多い。今バリーに居るポーランド人の Grenkamp などは正にその雄であろう。ブリヴァーも演説は發音がきれいで音量もあつて立派ではあるが語の上から見ると一寸劣るように思はれる（文を書かせるに文法や語法にだいぶ間違をやる。Vivo de Zamenhof や今度出た *Historio de Esperanto* 第二巻などだいぶ其點に非難がある）。東京に暫く居た Kuznecov などもたしかにうまかつた。Lingva Komitato なども云ふ所謂大家の中には存外なのが居る。フランスのエスペラント文法の泰斗エイモニヤーなどは話せない方の組で講演などはいつもフランス語ばかり。むしろ有名ならざる *Esperantistoj* の中に中々うまいのが居て驚かされることが多い日本人でも勉強し天分があればたしかに歐洲人にひけはさらぬことは確かである。由里忠勝氏、丘英通氏、八木日出雄氏など、どこへ押し出しても立流な雄辯家が既に多數生れてゐるのを見てわかる。英佛獨語などを苦しんで學び、苦しんでしやべるのは馬鹿な骨頂だと云ふ事をつくづく體驗した次第である。

3. 熱いぢやがいも

ベルリンに D-ro Fulda と云ふロシアの亡命客がある。モスクワの金持だが革命に際して幸ひ幾分の財産を持つて逃げたので今ベルリンでノンキにくらしてはゆけるらしい。ロシア式の樂天的な老人で面白い。エスペラントのためにもよく働く。英語の發音を評して曰く『英國人は生れた時に *Varmegaj terpomoj* を口中にほうばつて生れる。そして一生それ

を口に入れたまゝで墓にはいる。だから話をする時 ホワホワ云つてゐてわからない』と。けだし英語の發音を評し得て妙。更にアメリカ人に至つてはその上に鼻聲でやるのだからたまらない。エスペラントを話す時はそれ程でもないが矢張り多くの英國 *esperantistoj* は *varmegaj terpomoj* の peceto 位はたしかに口中したまゝである。『英國人はエスペラントが下手だ』と云はれるのも仕方があるまい。私なども耳のせいばかりで發音の明瞭な方でなく且つ早口で困るが、日本のエスペランチストも今後發音の明確と云ふことを各自平素心がければならぬと思ふ。講習會指導者などはここに氣を付けなければならぬことである。

4. Odeoni

エスペラントも生きた言葉だ。且つ造語が自由だから日常友達との間などの會話には随分面白いしやれや云ひ方が使ひ得られる。バリーのソルボンヌ大學講堂でやる金曜日の例會のあそではサンミツシエル街のカフェクリューニーへ多勢なだれ込んで夜半、または一時ごろまで飲んで話す。いざ歸るとなると近い地下鐵の停車場はサンミツシエルかオデオ。オデオ組人をさそつて曰く *Kiu odeonas?*

歐大陸人はよく飲む。従つて歐大陸のエスペランチストもよくのむ。„Unu momenton! (一寸待つてくれ) *Mi devas maltrinki.*“ 成程 *trinki* すれば必然の結果として *maltrinki* の要が起るわけ。Urini は吾々日本人には小ぎたなく聞こえるから *maltrinki* は勿論しやれではあるが面白い。尤も一丁毎位に共同小便所が立ちならんでゐる癖に處かまわす立小便をやらかし、街上至る處に『小便無用』(*Défense d'uriner*) の掲示があるバリーの人々には *urini* は何でもない言葉かも知れないが。

UEA の事務長ヤコヴ、Centra Komitato の幹事クロイツと Genève の町をぶらつく。時あたかも夏場の夕まで女共が妍をきそふてウジャウジャしてゐる。ヤコヴ曰く „*Vidu! Multaj belaj fraŭlinoj stratas.*“ どうしてこんなに居るのかと聞けば、フランス政府が毎日二ヶ列車女共を輸出してくるのだと云ふ。少しはなれて歩いてゐたクロイツ「オイ何の話だ」と口をはさむ。ヤコヴ „*Ni parolas pri la interna ideo*“ クロイツそれと悟つて „*Ha! interna ideo!*“

VERA VIVO

【本 當 の 生】

de Seisensui Ogiwara

tradukis Macue Sasaki.

Neniu ridos malriĉan terkulturiston pro tio ke li manĝegas kiel ĉevalo. Lia manĝaĵo estas malluksa kaj nenutra, do li ne povas ne manĝegi.

Kontraŭe, ne, same, riĉa komercisto penadas pli multigi sian riĉon, ne pro tio ke li ne scias esti kontenta, sed pro tio, ke li ne scias kiel uzi malmulte da mono valore; ĉe li valoro de mono jam malmultiĝis, li do ne povas ne kolekti multe.

Tiun kiu amindumaĉas multe da virinoj oni fortentas nomante lin voluptulo. Tamen ĉu li ne agaĉas tiel de vanta penso ke li povus akiri amon en kvanto kiun li neniel povas akiri en kvalito, ĉar li neniam povas ami sincere iun ajn virinon? Kiu senlace daŭrigas sian laboron eĉ en sia maljuneco, tiun oni admiras nomante lin energiulo. Tamen inter ili malofte troviĝas tiuj kiuj vivis plej senpantan kontentan vivon dum sia juneco; alivorte, ĉu li ne penas ĝui, ĉar li neniam sentis sian vivindecon, malintensan vivon en vane etendita tempo?

Ĉu mia diro sonus ironia? Tia tute ne estas mia penso. Mi nun deziras plene atingi la staton ke mi da nenio alserĉos posedi multe. Oni deziras alserĉi posedi multe ne pro tio ke li havas malmulte, sed pro tio ke li ne plene vivigas tion esence, ĝuste kaj profunde kio al li estas donita.

Ekzemple, se ni povas vivi tiel danke kaj kontente por hodiaŭa tago, ke ni ne alserĉas eĉ morgaŭon (ke ni ne timas eĉ morton), tiam ĝi ja estas vera vivo.

貧しい百姓が馬のやうに大食するといつて彼を笑ふものはあるまい。彼の食物は粗末で營養分を含む事が少い爲めに、多く食はなければ間に合はないのである。

反對に、いや同様に、富んだ商人が金を得た上にも得ようとするのは、彼が足る事を知らぬからではない、彼は些末の金を尊く用ふる事を知らぬ爲めに、即ち彼にあつては、金の價值が少くなつてゐる爲めに、多く集めなければ間に合はないのである。

多くの女に關係をつけたがる人を世間では好色家といつて指彈する。然し、其人はどんな一人の女にも深い愛を持つことが出来ない爲めに、もし量を以てしたならば、質に於て得ることの出来ない愛を得られはしまいかといふ、果敢ない心理からするのではあるまいか。

年老いて倦まず仕事を續けてゐる人を世間では精力家といつて賞揚する。然し、さうした人で若い時に心ゆく程の生き方をした者は稀なやうだ、つまり、其人は未だ嘗て生き甲斐を感じなかつたが爲めに、徒らに時間について、稀釋したる生を味つてゐるのではあるまいか。

斯ういふと私の言葉は悪く皮肉に聞こえるかもしれぬが、私の心持はさうではない。私は此頃、何事にでも多くを求めないといふ氣持に徹したく思つてゐる。多きを求めなくなるのは自分の得てゐる所が少い爲めではなくて、自分に與へられた所のものを本質的に、正しく、深く生かすことが足りないからである。たとへば、明日さへも求めない程（死をも恐れない程）、今日を充足して感謝する事が出来れば、それこそ本當の生だと思ふのである。

——(井泉水)——

La 21-an de Marto, 2928

Humoraĵo de Abel Kommok

La civitano 705436-Wh estis delikate vertikalgita per la horloĝvekilo (sistemo Dobar & Ko), kaj poste aŭtomate translokita en la tualet-aparaton (patentita de Bekrija S. A.) kiu—post dek sekundoj—jam elpuŝis ŝin lavita, kombita kaj bele vestita. La trimetrelargha fenestro tuj malfermiĝis kaj la freŝa blovo de printempa venteto plenigis la pulmojn de la ina civitano de Mondoplo, ĉefurbo de la Unuigitaj Ŝtatoj de Terglobo kaj Luno.

Post momenta rigardo al la agend-tabelo, fiksita sur la planko, la civitano Wh fingris trian butonon en kvara vico, kaj faris du paŝojn al dekstra flanko de la fenestro. Sammomente la distribuilo de la ĉambro per mola movo puŝis ŝin en aerofotelon, kiu rapide ekflugis preskaŭ senbrue. Malsupre, sub la piedoj de Wh, brilegis sennombraj vitrokupoloj kaj aeroplacoj de la urbego. Atinginte altecon de 2000 m. la aerofotelo mem eligis vitroidajn membranojn, kiuj formis hermetike fermitan ĉambreton, ja la aero iĝis tro kruda por la delikataj pulmoj de la ino. Laŭ la antaŭfiksita plano, registrita en la vojbobeno, la aparato flugis precize, sen gvido, kaj tiel Wh povis iom ripozi post la nokta dormo. En tiu epoko de la fino de 30-a jarcento, la tagoj servis por la ripozo, ĉar la dormo dum la noktoj treege lacigis homojn: tio estis kurioza aliformiĝo de homa superkulturita organismo, pli kaj pli adaptita al la artefarita lumo de ejoj. La okuloj de Wh komencis fermiĝi, kaj la agrabla sento de ripozo, post la nokta dormo kun larĝe malfermitaj okuloj, komencis penetri la tutan korpon kiam ĉe la orelo ekvibris teleparolilo: “...civitano Wh? ...ne maltrankviliĝu...daŭrigu vian maldormon...mi akompanos vin ĝis la Kriza Maro...tie ni vidiĝos...ĝis la...” Delikata rideto sulkigis kutime rigidan vizaĝon de Wh—ja parolis ŝia fianĉo, civitano 927644-Ae, kiu jam delonge, preskaŭ dum kvar tagoj, amindumis ŝin. Ili fariĝis gefianĉoj hieraŭ matene, kaj la edziĝa ceremonio estis projektita por postmorgaŭ. En la koraferoj Wh estis iom konservema, malnovstila ino, tute ne simila al siaj samaĝulinoj, kiuj havis kutimon de perioda edziniĝado, laŭ la oficiala re-

【註】 二九二八年即ち千年後の三月二十一日の出来事、奇抜な想像を筆にしたもの故そのつもりで讀まればならぬ。新しい發明品があるから新語も多く出る。そのつもりで。この時代になる人は名前の代りに『公民705436 Wh』など云ふ番號で呼ばれる。delikate vertikalg'ita そつと起される(現代の目ざましの様に時計仕掛の呼び起し機 horloĝ-vek'ilo で目をさまさすばかりでなく立たされてしまふ)。elpuŝis ŝin lavita ちゃんさ彼女を洗つて押し出す。tri'metr'e'larĝa 三メートル巾の。ĉef'urbo 首府。agend-tabelo (床に張

つた)備忘表(に一寸目をやつて)。fingris (第四列の三番目の釦を) ひねつた。distribu'ilo 分配機(他所へゆく場合の自動誘導機)。aero'-fotelo 飛行椅子。aero'placo 空中廣場。m.= metroj。vitr'oida = vitro'simila ガラス様の。hermetike ferm'ita 密閉せられた。voj'bobeno 道すぢコイル(につけた豫定の antaŭ'fiks'ita 計劃により)。ali'form'iĝo (人間の超開化 super'kultur'ita 體組織の奇體な)變化。art'e'far'ita 人工の(光にならされて來て)。ejoj 家や場所。tele'parol'ilo 遠距離通話機(telefon'ilo)。vid'iĝos=vidos nin。Kriza Maro 月にある海

gistro, tio estis tri-foje en semajno. Al ĉiu edziĝo korespondis ĝenerale kelkdek fianĉiĝoj, almenaŭ por la laŭmodaj inoj. Tiuepoke ne plu ekzistis diferenco inter fraŭlinoj kaj sinjorinoj, eĉ ne ekzistis la vortoj por tion esprimi. La regna sistemo ĉion reguligis de la naskiĝo ĝis la morto. Eta operacio al ĉiu naskiĝinta infanino, laŭleĝe plenumita, faris ŝin egalrajta al la pliaĝaj inoj. Tiu “antipartenogeneza” leĝo estis proklamita ankoraŭ en la 28-a jarcento, post la kruelega milito inter la amazonoj kaj deivinoj de Suda Ameriko. Nu, por la modesta Wh, tio estis nur 548-a fianĉiĝo, malgraŭ ŝia jam respektinda aĝo de 19 jaroj: en ŝia aĝo normala ino atingas almenaŭ 2000 fianĉiĝojn, laŭleĝe registritajn, ne kalkulante pli nombrajn intimajn fianĉiĝojn----

La aerofotelo flugis spiralvoje, trakurante ĉiam pli kaj pli larĝajn kaj altajn kurbojn. En dudek sekundoj, de la komenco, Wh atingis jam altecon je 50 km., kaj Himalajo pli ol dekfoje traglitis sub ŝiaj piedetoj, fariĝante malpli kaj malpli granda....fine, per subita ekskuo, la aerilo abrupte ŝanĝis la direkton, ekrapidis rekte al la luno, apenaŭ distingebla sur la nigreblua ĉielo. Sammomente aperis aerofotelo de Ae. Post du minutoj la aeriloj alluniĝis, kaj niaj geamantoj penetris en la Iridiuman Palacon situitan meze de la Kriza Maro, t. e. konata ebenaĵo videbla ĉe la lunbordo por terano kiu ĝin observas per lorneto. Luno estis relative maldense loĝata de lunanoj kaj teranoj, kaj pro tio ĝi fariĝis loko por am-ekskursoj. Nur en hermetikaj palacoj aŭ surmetante selenoskafandrojn la teranoj povis resti sur la luno. Lunanoj tiurilate estis pli liberaj, ilia dikega haŭto ilin ŝirmis kontraŭ la ekstremaĵoj de temperaturo.

La amrendevuo de Wh kaj Ae daŭris ekstreme longe, preskaŭ unu minuto, dum kiu estis priparolitaj mil temoj, projektoj. La sola karesaĵo kiun permesis al si tiuepokaj gefianĉoj konsistis en dolĉa rigardo, kaj ĝi jam sufiĉis por lacegigi ambaŭ geamantojn. Ektuŝo de la mano estis sole la rajto de geedzoj, kaj la antikva kiso ne plu ekzistis, konsiderata kiel treega brutajo, punata plej severe. Kun la evoluo de homokulturo la amo kaj la infanproduktado estis tute disigitaj: kvankam ambaŭ reguligitaj per regna sistemo. La infanoj estis biokemie produktataj en specialaj aparatoj—nur la unua ekĝermo devenis el iu vivanta homo, ordinare al-

(凹平地)の名。kutime いつもは(表現のない顔)。de longe 長いこと(さ云つても此の時代では四日間)。kor'afero=am'afero. sam'aĝ'ul'ino 同年配の婦人。regna 國立の(組織)。Eta operacio (生まれたばかりの女に法定にしたがつて)一寸手術をやれば(その女は年長の女と同様になる)。antiparteno-geneza『處女生殖(聖マリヤの如く他性に接しない生殖)禁止』(法案が發布せられた)。amazonoj (當時南米に住するであらう勇敢な女種族)。deirinoj 同上。respekt'inda aĝo 尊敬すべき(即ちもう一人前の)年齢。normala ino 尋常の女(なら少

くも二千遍)。ne kalkulanteは勘定に入れなくて。intima fianĉ'iĝo (此の時代の法規による登録成婚 fianĉ'iĝo laŭ'leĝe registr'ita に対して無登録の)内縁成婚。spiral'voje 螺旋路を畫いて。tra'kur'ante kurbojn だんだん廣い輪を畫き高く高くめぐつてゆき。tra'glitis (アルプス山が十回以上足下に) 迂るように働いた(まわつてゆくので地の方が迂つてまわるように見えた)。apenaŭ disting'ebila 殆んど目に見えるかみえぬかの(月)。aer'ilo 飛行椅子を指す。al'lun'iĝis 着月した(お月様に着いた)。penetris (イリヂウム宮に)入つて

trangu'lo, science elektita. Unu kuba milimetro da lia glanda sekrecio enhavis kelkmilionojn da pedoforaj ĝermoj, el kiuj unu sufiĉis por unu pedogena aparato. Nu, la jara infannasko estis fiksita je 44 miliardoj, do finfine la sekrecio de unu homo, dum kelkaj semajnoj, abunde provizis la aparatojn. Dum sia funkcio tiu homo havis honoran titolon de "Homarestro", kaj la tuta jargeneracio konsideris lin kiel sian patron. Inoj kaj ne-aristokrataj viroj estis senseksaj, kiel formikoj-laboristoj, pro la eta regna operacio. Tamen la am-instinkto atavisme ekzistis, kaj la regno devis ĝin laŭleĝe registri.

La salonoj de Iridiuma Palaco prezentis al niaj geamantoj aspekton de vastega kaj plenlibera spaco, ornamita je florantaj plantoj, izolaj molaj kuŝlokoj. Meznombre, sur dek kvadrataj metroj estis tie nur unu paro, kaj tio impresis kiel vasta libereco, kun ebleco sin senti „solaj". Dume sur la tero la homoj estis lokitaj po unu sur ĉiu kvadrata metro, sub plafono alta du metrojn. Estis kvazaŭ abela ĉelaro kun enaj larvoj. Tiu denseco rezultis el la loĝsistemo regne organizita. Preskaŭ 5000 miliardoj da homoj tiam vivis sur la terglobo, kies surfaco estis plejparte okupita de plantejoj, varmuzinoj, deponaroj, akvokolektilaj regionoj. Tiel, la registaro sukcesis loĝigi en unu domo, kies alteco, larĝo kaj longo estis 100 metroj, do en tiu kubforma domo, loĝigi 400 000 homojn. Per tiu genia sistemo la nutrado kaj polica kontrolo estis faciligitaj ĝis maksimumo, kaj samtempe la psikenergio povis esti koncentrata pli facile. En tiu perfekta epoko el la du ĉefaj fontoj de natura energio: suno kaj centra fajro, la tekniko produktis serion da superenergioj: vegetara, biokemia, ultraradia, kaj psika. Dum 12 horoj ĉiutage la homoj de ĉiu domo produktis psikenergion, kolektatan per parabolaj speguloj kiuj ĝin reflektis en la centran psikejon. Tiu regna provizo da psikenergio poste estis distribuata inter la regnaj scienculoj, kiuj cerbe laboris tage kaj nokte, inter anoj de la registaro, kaj polico. Ceteraj homoj ne bezonis tiun energion. De la nasko ĝis la 10-a jaro ĉiu civitano rajtis okupi meznombre dek kubmetrojn, necesajn por lia disvolvo. De la 10-a ĝis la 20-a li okupis nur 2 metrojn, sed kompanse rajtis periode fianĉiĝi kaj edziĝi, vojaĝante al la luno. Dum 12 horoj lia

いつた。relative mal'dense loĝ'ata 比較的人口が少い。seleno'skafandro 潜月服(即ち今日の潜水服, 月は空気が稀薄故 skafandro が必要)。ekstrem'ajoj (寒熱の)兩極端。am'rendevuo あひゞき。kares'ajo いちやつき。lac'eg'igi ぐつたりさせる。brut'ajo 蠻行。dis'ig'ita 分けられてゐる。biokemie 生化學(醫化學)的に。Pedofora=infannaska。pedogena aparato 孵兒(子供製造)器。jara 年々の(生兒)。“hom'ar'estro”。formikoj-laboristoj 労働蟻。atavisme 隔世遺傳的に。mez'nombre 平均して。solaj 人氣がない(様に感ずる; 地上では

一人當り一平方メートルしかあてがわれてゐないから)。enaj larvoj 巢立たぬ幼蟲。plejparte 大部分。varm'uzino 温室。depon'aro=proviz'ejoj。akvo'kolekt'il'aj regionoj 貯水ボムプ地域。ĝis maksimumo 出来る限り, 極めて。psik'energio 精神エネルギー, 心力。super'energio 超級エネルギー。ultra'radio 光外線。centra psik'ejo 中央心力蒐集所。dis'volvo 發育。depon'ata 蓄積される。jara amortiz'ado 年々の消却(即ち殺すこと)。Tio --- rilate al これは(労働人類)に就てである。al'repondis ... ---につゝかふ, に相當する。kondens'ata

psikenergio estis deponata. Post la 20-a jaro okazadis ĉiujara “amortizado” de la homoj per striknino, elektante unue malfortulojn, kadukiĝajn homojn. Ordinare la aĝo de 24 jaroj estis la vivlimo, sed en esceptaj okazoj oni vivis ĝis 25 aŭ eĉ 26. Tio estis tiel rilate al la labor-homaro, sed la aristokratio (registaro, sciencistoj, polico) posedis senliman liberon, eblecon translokiĝi ekster la domoj kaj laborejoj, kaj ĝia vivtempo estis 180 ĝis 300 jaroj. Je unu aristokrato alrespondis 10 000 000 da laboruloj. Tiel sur la tuta terglobo vivis nur 500 000 aristokratoj. Dank’ al la mirinda eltrovo de sciencisto Dreistein, en 28-a jarcento, la tempo povis esti kondensata kaj dislarĝata per apartaj transpsikaj aparatoj. Tiel, por kreskigi pomarbo, de la semo ĝis matura arbo fruktoportanta, anstataŭ tri-kvar jaroj, kiel estis en la antikva krudnatura tempo, nun sufiĉis du-tri sekundoj. Homa infano estis produktata, anstataŭ la antikvaj 270 tagoj, en duono da sekundo, kaj poste dum 10 sekundoj li atingis korpan maturecon. Teatra prezentado, kiu daŭris unu sekundon, faris impreson de multjara okazintaĵaro. Kompreneble, ankaŭ la geamantoj travivadis longajn jarojn da ekstaza amindumado, dum eta sekundero da kosma tempo. Se la antikvaj maljunuloj, en 80-a aŭ 90-a jaro, sentis ke ilia tuta vivo daŭris kvazaŭ kelkajn momentojn, la novaj superhomoj dum unu kosma jaro travivis kaj trasentis jarcentojn, jarmilojn da realaj okazintaĵoj. Cetere, nur la aristokrataro sciis pri tiu duobla tempo: kosma kaj artefarita, la laboranta popolo neniel konis la realan kosman tempon, kaj la artefarita tempo estis laŭdezire dislarĝata per absorbo de specialaj transgasoj. La regno estris nur la kosman tempon de ĉiu civitano, por profiti la energion necesan al la industrio de la terglobo, sed la registaro ankaŭ donis eblecon al la popolo vivi en la artefarita tempo laŭplaĉe—milojn kaj milionojn da jaroj. Estas vere ke la reala psikofiziologia kvanto da plezuro estis limigita, kaj kun la dislarĝigo de la tempo la plezura koeficiento treege maldensiĝis. Nur la intelekto larĝiĝis kun la tempo, t. e. konscio, komparpovo, memoro. Finfine, la registaro estis donanta al ĉiu fiksitan kvanton da plezurprovizo, kiun ĉiu povis trasenti en daŭro de 24 kosmaj jaroj; nu de ĉies bonvolo dependis

(時間を)凝結させ得る。dis'larĝ'ata (時間を)展べひろげ得る。trans'psika 超精神的。frukto'port'anta 實をむすぶ(成熟した樹になる迄に)。krud'natura tempo 未開時代。atingis korpan matur'econ 身體が成熟する。okaz'int'aĵ'aro 出来事。ekstaza 恍惚たる。sekund'ero 瞬間。kosma (當時の超人が凝結してこしらへた人工時 art'e'far'ita tempo に對して實際の)宇宙時間,天文時間。super'homoj 超人。laŭ'dezire 希望によつては。trans'gaso 超ガス(に吸ひこませて時間のをばし展げ得る)。donis ebl'econ ... laŭ'plaĉe 人民が望みとあら

ば人工時に生きることを得さしめる。Psiko-fiziologia 精神生理學的の(即ち人間として體に感ずる,快樂の分量は制限を受けるようにされた)。plezura koeficiento (時間がのばされるので)快樂の係數(は稀薄にせられる)。reg'ist'aro 政府(が快樂の定量を與へる)。fizika laboro 體力による勞働。persistis 頑張つてゐた。ne'al'ir'ebla 行くことが出来ぬ。pra'homoj 原人,太古人。kvazaŭ'bestoj 類獸人。laŭ la legendo 語り傳へによれば。pens'-vibr'ado 思考力の靈動。materia korpo (心力に對して)形骸。tele'fulmo (無線電力でやる)

distribui tiun plezuron sur la daŭro de mil, dekmil aŭ milionoj da psikaj jaroj.

Maŝinoj anstataŭis fizikan laboron de la antikvaj homoj kaj brutoj. Plantoj havigis ĉion por la nutrado, do la bestoj ne plu ekzistis sur la kultura tero, ili ja estis detruitaj ankoraŭ en la 23-a jarcento. Nur kelkaj miloj da sovaĝaj homoj persistis en Aŭstralio, sola terparto nekulturita, ĉar nealirebla por la registaro. Tiuj prahomoj, kvazaŭbestoj, laŭ la legendo, estis el la antikva gento de bramanoj. Ili posedis specialan psikan povon, sendependan de la maŝinoj, kiu estis pli potenca ol la maŝina psikenergio de la superhomoj. Se iu taĉmento proksimiĝis al Aŭstralio kun la celo tie starigi kulturan ordon, la bramanoj en unu momento mortigis la taĉmenton je distanco, per sia pensvibrado. Ilia materia korpo estis protektita kontraŭ venenaj gasoj kaj telefulmoj de la registaro de Tero kaj Luno. Sed, laŭ la konstato de la oficialaj sciencistoj, la bramanoj estis kretenoj, idiotoj per sia sovaĝa intelekto, ĉar ili neniam uzis sian psikovibradon por detrui la tutan kulturan registaron kun la tuta laborularo. Kvazaŭ la antikva bovo kiu povis kornofrapi sian mastron, sed tion ne faris pro sia besta senpenseco. Ankoraŭ alion konstatis la sciencistoj: ke la bramanoj ofte penadas, per telepatia influo, sugestii al la registaro la antikvajn ideojn pri la satana karaktero de la maŝinismo, pri la egalvaloro de homoj laborantaj kun la aristokratoj, ktp. Sed la registaro malatentis tiujn absurdajn sugestiojn.

*

*

*

Bramanino Agniama sidis sur la varma mola sablo de la Perla Golfo, farante kolringon el perlamotaj konketoj. Nur kelkaj kunkudritaj sekfolioj kovris ŝin de la zono ĝis la genuoj. La blueverda maro ritme bruis, ĵetante de temp' al tempo masivajn ondegojn, kiuj lekis la sablon, disfalante je neĝeblanka ŝaŭmo. Freŝa venteto mildigis ardan sunon. Ĉi-vespere Agniama renkontos sian amaton Kiramurtu apud la roza arbareto. La ornamo el konketoj do estis urĝa. Verdeventraj muŝoj zumis, transflugante de la brunaj algoj, elĵetitaj de la maro, al la ekputrantaj ostroj, kiuj restis sekaj pro la forfluo. Iufoje la muŝo tuŝis la nudan korpon de Agniama,

遠距離電撃。kretenoj=idiotoj クレテン病人, 阿呆症患者。Kvazaŭ la antikva bovo sen'pens'eco 昔生棲してゐた牛と云ふ獸が自分の主人を角で突ける(korno'frapi)のだが, 獸のあさましさそれに気づかずにつ突かないのと同様(此のプラマ宗人だちが地月合衆國の超人をやつつけないのは阿呆の致す所)。per telepatia influo 靈動的の作用で(政府に暗示を與へようとする)。pri satana karaktero de maŝin'ismo 機械萬能主義は惡魔の性のものである(と云ふ暗示)。egal'valoro (労働者は上流社會の者と) 同價值(であると云ふ暗示)。

Perla Golfo (オーストラリアの)『真珠灣』。kol'ringo 頸輪。perlamota konk'eto 真珠母の小貝。kun'kudr'itaj sek'folioj 綴り合せた枯葉。de tempo al tempo 時々。masiva=grandega. disf'al'ante je neĝ'e'blanka ŝaŭmo 雪白の泡をなして崩れ落ちては。Ĉi-vespere=tiun ĉi vesperon。urĝa 急の必要。Verd'e'ventra 腹の緑な(蠅が羽音をたてゝゐた)。algo 海藻(の處からくさりかけた骨の所へ飛んでゆき乍ら)。for'fluo 引き潮。turnis ĉirkaŭ... (思ひは).... のめぐりをさまよふ。muskol'forta 筋肉たくましい。ir'maniero 歩みぶり。kabano 小屋。

kaj la mano ĝin pelis for. Pensoj ŝiaj turnis ĉirkaŭ Kiramurtu...lia muskolforta korpo, elasta irmaniero,...lia kabano el ŝelegoj, meze en arbaro, tri horoj da marŝado de ĉi tie,... Alispeca zumado aŭdiĝis super ŝia kapo, ŝi suprenigis la vizaĝon: estis aerofotelo de iu superhomo. Agniama tuj rememoris lastan paroladon de la pastro en la sankta arbareto...superhomoj kiuj torturas labor-homojn...kontraŭnatureco...teruraj maŝinoj...putraodoro en iliaj domoj, pli dense loĝataj ol la abelujoj...nervemalsanaj...operaciitaj... La pastro laŭte diris la preĝon... "Dioj, diru al Li, ke ni tutsentas Lian favoron doni al ni diece belan naturan vivon. Lia volo lasas la superhomojn en ilia sakrilegia agado kaj laboruloj en la torturo...Dioj, diru al Li ke ni tutkore dankas pro Lia favoro permesi al ni resti nekulturaj..." Pensoj de Agniama jam estus ekflugintaj pli malproksimen, kiam subite eksonis gajaj krioj de infanoj kiuj alkuras sin bani en la maro...Iliaj brunflavaj korpetoj belas sur la bluverda fono de la akvo kaj sur la neĝeblanka ŝaŭmo...Knaboj, knabinoj, tutnudaj saltas en la akvon, subakviĝas, naĝas, persekutas unu la alian, kun sonoraj krioj...Blankaj mevoj super ili ridbleketas, egalmezure svingante la flugilojn, la beko turnita al la akvo... Jen, unu mevo falas, kaptas arĝentan fiŝeton, kaj forportas ĝin al sia nesto. Ree aperis la aerofotelo, ĉifoje pli alta,...Agniama jam alkutimiĝis al la flugantaj superhomoj, kiuj ne ĝenas pli ol la muŝoj, sed la lasta prediko pelsigis ŝin hodiaŭ...Unufoje, tio estis antaŭ kvar jaroj, kiam ŝi estis knabineto, okazis ke unu aerofotelo falis sur la marbordon. La pastro tiam klarigis ke ĝi ne estis pro iu manko de la maŝino, sed pro la subita nerva atako ĉe la superhoma laborulo, kiu ekvolis sin mortigi...Nu, la tuta vilaĝo tiam alkuris por vidi la strangan korpon, rozeblankan, palan, kun tre delikata haŭto, la piedoj etaj, nekapablaj porti la korpon, la kapo tro granda, kvazaŭ ŝvelinta, la fingroj terure longaj, kiel piedoj de araneo...putraodoro estis sentata de tiu gelatensimila, meduzeca korpo, mortinta nur antaŭ kelkaj minutoj...sur kiun la verdeventraj muŝoj avida amaŝiĝis...baldaŭ ĝi estis forbruligita, en lignamaso. Agniama repensas pri Kiramurtu. La maro bruas...

ŝel'ego 大きな皮。supr'en'igi 上げる。torturi さいなむ。kontraŭ'natur'eco 自然にそむけること。abel'ujo 蜂の巣。nerv'e'mal'sana 神経病の(超人)。operaci'itaj 手術を受けた。tut'senti さつくりのみこめてゐる。sacrilegia 不敬な, 神をないがしろにする。fono 背景。sub'akv'iĝi 水に潜る, 沈む。tut'nuda 丸はだかの。persekutas unu la alian 追っかけつこをする。kun sonoraj krioj かん高の叫をあげて。rid'blek'eti 笑ふような音に鳴く。egal'mezure 同じ調子(に翼をはたいて)。unu mevo falas 鷗が一羽舞ひ降りて。ĉi'foje = tiun ĉi

fojon。ĝeni 邪魔になる。okozis, ke... したことがあつた。ne'kapablaj (體をさへ) 得ぬ(小さな足)。ŝvel'inta はれあがつた。gelaten'simila ゼラチンのような。meduz'eca くらげの様な。for'brul'ig'ita 焼きすてられた。lign'amaso 薪の山。mar'bordo 海岸。

〔記者記〕 この原稿は U. E. A. にその人ありとされた Petro Stojan 氏(ロシア人)から學會宛に送つてきた原稿の一つである。まだこの外にも面白いのが來てゐます。これは同氏の originalaĵo だと想像します。

昭 和 貳 年 度 (十二月末現在)

[A] 通 常 經 費

■ 收 入 ■

普通維持員會費	4009.47圓
贊助特別維持員會費	335.10
圖書取次利益其他雜收入	301.56
廣告料金	441.36
預金利子	90.91
事務所特別維持費寄附	306.50

計 5484.90

昭和元年下半年期より繰越 1404.19

合計 6889.09

■ 支 出 ■

印刷費(雜誌其他)	2239.99
臨時増刊發行費	200.00
送料及通信費(雜誌、取次圖書等)	551.77
振替料金	10.63
事務所費	780.00
消耗物品及備品費	84.04
役員會費	35.00
諸謝禮	244.00
圖書寄贈	10.45
地方會拂戻	61.46
取次圖書紛失損	2.60
文庫費(圖書買入及保存費)	200.00
雜 費	36.01
宣傳費	239.70
常設代表者團年賦課金	50.00
第十五回大會寄附	60.00

計 4,951.66

◎差引殘(次年度通常經費
として繰越)

1,937.53

此の殘額はつまり本年度會費として昨年の
中に當會があづかつた前納會費の合計です。
つまり之は利益金でも何でもありません。

[B] 財團法人資産會計

昭和二年十二月末日現在

(1) 永代基金總額	7,814.50圓
◎内譯	
前年度末現在(安田信託預金)	7,261.75
本年度寄附金(村井銀行預金)	109.60
本年度信託利息(安田信託預金)	443.15
計	7,814.50

(2) 常用基金總額 2,500.00

◎内譯

學會事務所敷賃	132.00
振替貯金及約束郵便保證金	93.00
出版部より償却金	1,773.99
法人設立當初在庫圖書見積價 額の賣却回收金	26.15
前年度より持越現金	474.86

計 2,500.00

〔附記〕 前年度會計報告にて豫報せし通り
本年度に於て常用基金は全く現金となりたる
次第なり。

[C] 在 庫 金

昭和二年十二月末日現在

永代基金	7,814.50圓
常用基金	2,500.00
次年度へ繰越通常經費	1,937.53
特別宣傳資金	45.95
出版部資金	664.47
計	12,962.45

◎在庫金處置

振替口座(東京 11325)	1,025.33
同 上 (東京 32089)	13.91
同 上 (長野 3283)	47.79
安田信託預金(中村名義)	7,704.90
村井銀行預金(大井名義)	1,265.41
安田銀行定期預金(三石名義)	2,000.00
同 上 當座預金(同 上)	231.32
事務所敷賃	132.00
郵便保證金	93.00
現金及取次在庫圖書代	448.79

計 12,962.45圓

■ 永代基金寄附金領收報告 ■

[100.00]	井上萬壽藏氏
[5.00]	渡邊武夫氏
[2.60]	大島義夫氏
[1.00]	稻垣刀利太郎氏
[1.00]	中村清春氏
◎以上合計	109.60圓

■ 學會事務所特別維持費 ■
寄附領收報告

[200.00] 某 氏
[87.50] 小坂 狷二氏
[5.50] 駒井 鋼之助氏
[5.00] 萩野 末吉氏
[8.50] 進藤 靜太郎氏
◎以上合計 306.50圓

■ 學會備品寄附受付 ■

書籍戸棚一個.....由比 忠之進氏

去る1月14日の評議員會にて可決の上1月29日の理事會にて一部修正の上確定せし本年度豫算案次の如し。

昭和三年度豫算案

■ 收 入 ■

普通維持員會費（本年度に

徴収すべきもの	$900 \times 2.4 = 2,160.00$ 圓
賛助特別維持員會費（同）	$20 \times 6.0 = 120.00$
本年度新入維持員會費	$360 \times 1.2 = 432.00$
圖書取次利益其他雜收入	500.00
廣告料金	100.00
預金利子	50.00
昭和二年度末現在既納會費	1,937.53
合計	5,299.53

■ 支 出 ■

印刷費（雜誌其他）	2,550.00圓
送料及通信費（雜誌取次圖書其他）	600.00
消耗品及備品費	180.00
振替料金及集金料	60.00
事務所費	840.00
役員會費	59.53
諸手當	330.00
取次圖書寄贈	15.00
地方會拂戻	100.00
圖書取次損失	15.00
文庫費	60.00
雜 費	80.00
宣傳費	300.00
常設代表者團年賦課金	50.00
大會寄附金	60.00
合計	5,299.53

〔以 上〕

雜 報 欄

去る1月14日學會で評議員會を開いた。會するもの評議員12名の外に大井、三石兩常務理事出席。學會の昨年度會計報告と本年度豫算案の承認の件について議した。本年度豫算については年鑑を出すか否かの問題について年鑑をだす必要が多いが會員全部の氏名を入れた名簿は百數十圓を要するので經費のやりくりがうまくゆかないからといふので、いろいろ議論の末全會員の名簿はだせないならせめて四五十圓を捻出して各地地方會の會長、會長私宅、會合日、會事務所所在地、會の幹事（委員）の氏名及住所位を入れた菊版半截二、三十頁のものをだすことにしてはこの提案があつて結局大體この案を採用した。而してもし年末に到り會計に餘裕を生ずる事が明かならばその時會員名簿でもだすといふ事に一決した。五錢とか十錢とかの實費をさつて名簿をだしてはこの論もあつたが之は甚だ少額の事故案外實現しやすい様にみえて實は大變實行不可能な案なので採用されなかつた。

會議後種々學會の事について話しあつた。學會が近年出版の方に努力を始めたので大分活氣を呈して來たが多少商人的に墮しはしないかとの説をなされた人もあつたが、學會が設立當初の如く全然出版に指を染めなければ成程上品にみえるがそれでは宣傳ビラの千枚二千枚をこしらへるのにも四苦八苦せねばならない状態を永遠にくりかへさねばならなかつたにちがひない。我々は學會設立の當初から今日迄殆んど十年の間同じ窮狀同じ勞力奉仕が依然としてくりかへされてゐるのを目撃し、又實際自分自身その仕事になづきはる事によつて學會が唯金のない故に新計畫が何一つとして行はれない事を痛感した。實際學會の毎日の事務に頭をつつこんでみない人はこの事が十分判らない事は無理のない事ではあるが、もう少し實狀を推量していただきたいと思ふ。學會には勞力提供をして下さる努力の士に乏しくはない。然しながら無報酬勞力提供をして下さる方々はすべて晝間は勤務のある身體である。せめて學會も財團法人である以上一人位は有給の事務員でもおきたいが今の會費では昨年度の決算報告でみる様に駄目である。學會は別に株式會社の様に利益本位ではないから利益をみななくてよいが、もつと多額の宣傳資金が捻出されれば十分な運動ができない。昨年度の宣傳に要した金額は僅か240圓にすぎない。もつともつと宣傳上そ

の他の事をやりたいが先だつものは金である。我々は各地に熱心な多数の闘士を有し本部に又多数の闘士を控へてゐるが如何に小さい計畫も無一物でできるものは何もない。學會が出版によつて多少の益金を獲て之を宣傳資金としたいがために出版に指をそめたのである。まだ僅かにその事業の緒についた許りであるが、昨年中に一昨年學會の常用基金から借りた金をすつかり返済する事ができ、その上六百圓程の基金が生じた事は同慶の至りにたえません。學會の出版事業は營利本位に立脚して計算したものでない事は最近の出版物によつて御了解下さつてゐる事と思ひます。少しでも安いエス書を提供する事が學會出版部の根本の使命であり *moto* とする所です。ですからものによつては收支が一致するだけで一錢の剩餘もないものもあります。しかし又中には各地同志諸君の盡力によつて部數が澤山でるので多少の剩餘をみる事ができるものもあります。尤もこの剩餘金はつまり學會で出版上の諸準備や書籍の荷造發送等を無報酬でやつて下さる人々があるから出てくるのであります。

學會の使命が單に學術研究團體の様な趣意のものなら上品に一切の商的行爲をやめて年五圓位の會費で毎月三四十頁位の會報を發行して悠々自適してゐてよいのでありませうが、我々はエス語の宣傳と云ふ事を考へればなりません。宣傳と云ふ以上我々は街頭に立つ覺悟がなくてはなりません。街頭戦はいろいろ方法もありませうが大體に於て講演會講習會を初め廉價なエス書の一般化や無料の宣傳パンフレットの配布その他です。こゝに於て最も必要なものは *homo* と *mono* です。人の點に於て遺憾なき我が學會も *mono* の點に於て未だ必しも樂觀を許しません。この *mono* の檢出のため我學會は *vole-nevole* に出版部を創設すべくよぎなくされたのでした。象牙の塔にたてこもつて悠々自適するは我々のさるべき道でせうか。

(53 頁「單語記憶法」の續き)

7. 作歌法

出口王仁三郎氏の珍著、記憶便法エス和作歌辭典の利用。
下り坂馬も元氣を恢復し

一時間にクーリ(九里)を走る

この中の面白いのを選つて百人一首歌がゐるたにしたのが天聲社から出ている。

8. 繪單語法

Bildotabuloj por la instruado de Esp. (Hirt 發行)。例: p. 46 の *kuirejo* の繪には、その中の *kaserolo*, *plado*, *akvotubo* … 等に番號がついていて下の單語表と相應じている。p. 47 には *kuirejo* についての會話がある。

而して我々は相當の決心をもつて出版を始めた以上すゝしい顔して單に士族の商法的にやつてゐたのでは遺憾ながら *nuntempaj ekonomiaj cirkonstancoj* からみて何といつても損失を招くより外はありません。それで始めた以上相當の覺悟で一般普通の出版業者の眞似はできなくても大體それに追隨して行ける位の商賣上の努力を拂はねばなりません。こういつた意味で出版部の活躍してゐるのを目して學會が本來の使命を没却して商人氣質になつたものと誤解されては迷惑至極です。我々は眞の目的を忘れたのではない。否眞の目的のためかく活動してゐるのである。或人は學會の永代基金を年 6 分 5 厘で預けてゐかずに借家でも澤山たて、年二三割の利益をうめと忠告せられ或人は *kafejo*, *restoracio* を經營して大いに儲けるべしと云はれた。併し我々はそんな事までやるだけの勇氣もなく又そんな事までして資金を得たくもない。併しエス書の出版は全然收支償はすとするも又よし損失を招くとするもエス運動上に一つの貢獻をなすものである事を思へば、出版部の努力は大いにエス運動上からみても必要なことでありそれが又多少なりとも剩餘金を得る事ができるとすれば尙更努力すべき必要があるう。

去る 1 月 29 日正午から主婦之友社樓上會議室にて學會理事會開催。出席者理事監事評議員を合して 12 名。出席不能の理事からは委任狀をいたゞいた。中村理事長より新理事小坂土岐兩氏を紹介の後議事に入り (1) 昨年度決算報告の承認 (2) 本年度豫算案の審議 (3) 昨年度事業報告 (4) 新評議員(全部改選)を理事長より指名。決算報告の豫算案につき三石理事より説明の上審議す。豫算案について美野田理事の提案により事務所費を幾分増加すべき事となり。小坂理事の案に従ひ修正の上可決。昨年度事業報告は大井理事之をなし、別に岡本評議員より出版部の報告をなせり。

●エスペラント對譯詳註叢書第一編

マテオ・ファルコネ

定價三十五錢
送料二錢

佛國文豪ブロスベル・メリメ原作
大島義夫氏譯註

横三寸五分縦五寸八分本文六十頁
表紙美麗優美・印刷鮮明

「カルメン」の作者として十九世紀の佛國が有せし世界に令名高き大文豪メリメの傑作の一。世界を風靡した一世の英傑ナポレオンを生んだコルシカ島の一角に灌木のおひしげつた林がある。これは島人によつてマキーン(Makis)とよばれてゐる。マキーンは殺人強竊盜の兇狀持の避難所である。或る日マキーンを出て町へ買物にいつた歸り憲兵に追跡された一惡漢をかくまつたマテオ・ファルコネの息子は遂に憲兵曹長のみせびらかす金時計に眼がくらみ惡漢を裏切つてかくれ場所をしらした。それを後で知つたマテオの怒は母親の悲しみをたえてコルシカ島人の正義の名の下に一人息子に銃殺する。

好評嘖々

譯文流麗にして詳しい脚註がある。せひ一本を備へ寸暇を利用して大いに御活用下さい。

★譯文流麗 ★珠玉名篇
★裝幀優美 ★價格至廉

東京市牛込區新小川町3の14

財團法人 日本エスペラント學會

振替口座東京一一三二五番

小坂 二氏
大井 學氏
岡本 好次氏

共著

新四六判・本文六十頁
厚表紙美麗・印刷鮮明

定價三十錢
送料二錢

エスペラント中等讀本

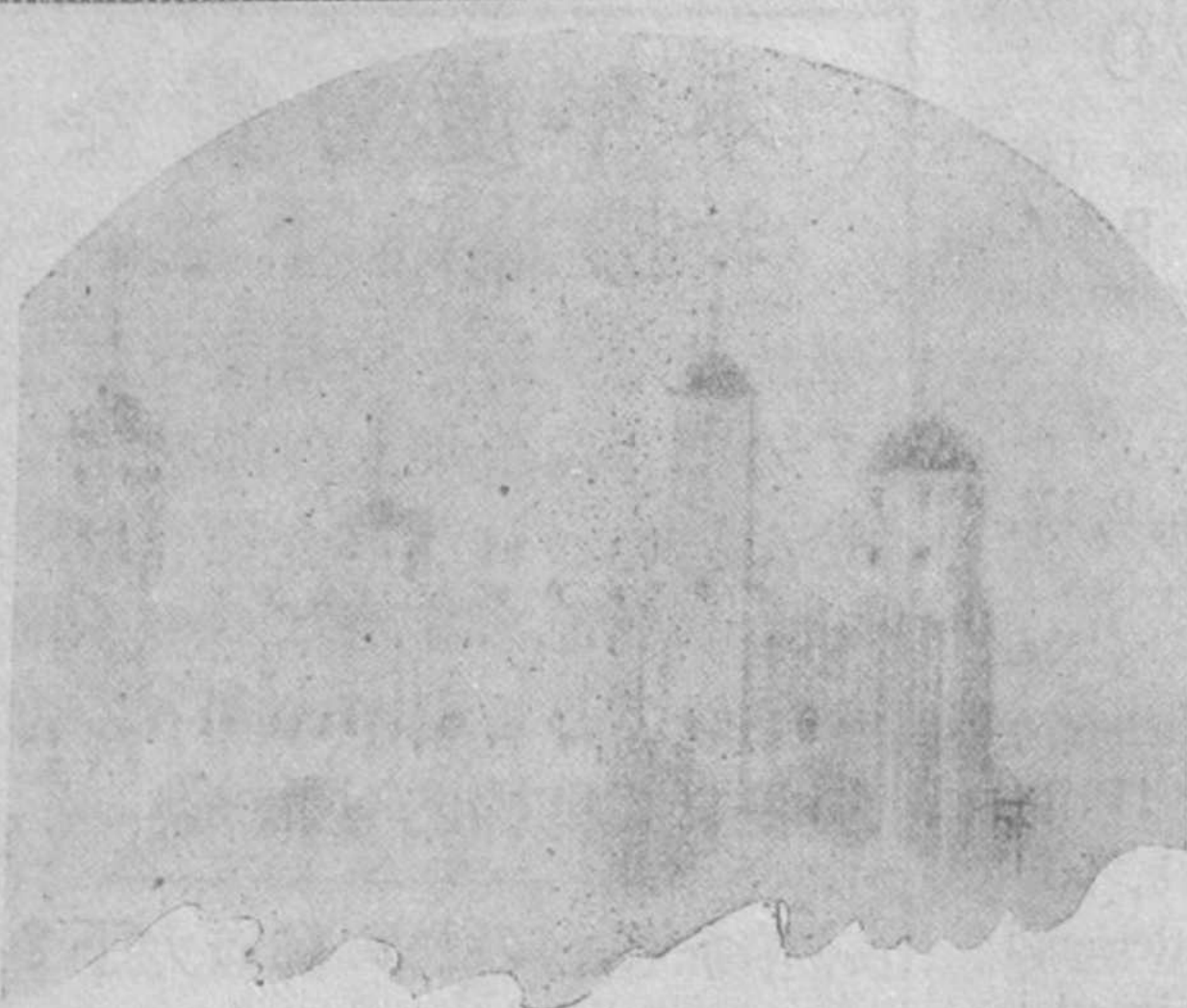
(第一輯)

◀ 好評如湧 ▶

初等講習の際の讀本として又初等講習を終へた人一通り獨習書をよんだ人々の適當な讀み物が無いとは我邦同志の遺憾に思つてをつた所である。本書はこの缺乏を補ふため世界各国で出版されてゐる讀本 (Tegolibroj) 十餘種を涉獵してその中から興味の深いものを選択したものであり著者多年の経験に基いて配列したもの。前半は興味深き笑話一口噺逸話等をおさめ後半は興味深い隨筆的讀み物 (短篇) を集めたもので興味の中にエスペラントの語法に習熟せしむるに最適の讀本である。中等講習や研究輪講會の際の用書として大いに御利用下さい。本文六十頁でしかも定價僅か三十錢と云ふ至廉です。

東京市牛込區新小川町三ノ十四
振替口座 東京 一一三二五番

財團 法人 日本エスペラント學會發行



NACUME-
SOOSEKI

La Turo de Londono

tradukita de
D-ro Nishi-S.

文豪 夏目漱石 先生 原作
醫博 西 成甫 先生 エス 譯

倫 敦 塔

菊判本文二十八頁・美麗飾繪入
赤紫色厚紙表紙・印刷美麗

定價 { 上 製 三 十 錢
並 製 十 五 錢 送料各二錢

明治文化の生みし一代の文豪夏目漱石先生の傑作の一たる「倫敦塔」は今や西博士の婉麗なる譯文によつて我エスペラント文壇に移し植えらるゝに到つた。其流麗の文に添ふるに博士自筆の倫敦塔と渡舟の飾繪(り)をセビヤ色インクにて毎頁印刷挿入せしを以て錦上更に花をそへし趣きあり。

實に我邦エス界における最初の最も美麗なる冊子である。是非一本を！

上製と並製のちがひは上製は用紙クリームコットン紙なるに並製は普通の白紙なること、上製は表紙が銀色印刷なるに並製は白色なることの二點の相違あるのみ。上製は百部のみ並製は千部印刷せり。之等印刷は西博士の御好意により幾分の補助をしていたので、今回のものは二色刷なるにかく安價なり。再版の際はこれほど安價にて提供し得るか否か疑問である。賣切れぬ中に御注文下さい。



東京市牛込區
新小川町3の14

財團
法人

日本エスペラント學會發行

振替 口座
東京 11325 番

KORESPONDA FAKO

★Italujo:—S-ro Giuseppe Maria Rosa, 115 via principe Umberto, Roma (128); 日本人と文通したし。presaĵo, broŝuro, desegnaĵo, ĵurnalo 等の交換を望む。

★Ĉeĥoslovakujo:—S-ro Arno Langer, Par-chen Schelten N-ro 55, Bohemujo; L, P, IP, kĉl. junaj ĉarmaj fraŭlinoj.

★Japanujo:—S-ro Katutaka Ŝiomi, c/o Ni-chidai-Igakuka, Surugadai, Tokio, (studento) deziras koresp. kun gealilandanoj per IP.

★Germanujo:—S-ro Theo Hollenbeck, inst-ruisto, Horrem bei Köln; deziras interŝanĝi PM. nur kun seriozaj kolektantoj japanaj, ĥinaj, ĥindaj kaj sud-aziaj. Ne sendas unue!

★Germanujo:—S-ro Heinz Pfeil, Horrem bei Köln, junulo 17-jara, deziras korespondi kaj interŝanĝi Pl., PM. librojn, ĵurnalojn ktp. kĉl.

★Germanujo:—S-ro Konrad Deubler, Arcis-str. 48/II.r., München; deziras koresp. kun ekster-eŭropanoj, nepre resp.

本年度會費を お拂込み下さい

雑誌發送封筒を筆耕屋へだします
ので「前金切」の印を捺しま
せん。いづれ「前金切」は別便
で通知致しますがなるべく前金
の切れてゐる事がお判りの方は
振替にて御拂込下さい。

倍加運動のため御盡力下さ
いました方々の芳名は來月
號へ掲載致します。

東京市牛込區新小川町 3 の 14

財團法人

日本エスペラント學會

〔振替口座東京 11325 番〕

◎國字問題解決の先驅◎

月刊
雑誌

ローマ字世界

定部二十錢
價一年前金貳圓

◎日本の國字となるべき名譽と運命をもつた日本式綴方による
ローマ字の雑誌！
◎標準的綴方としての日本式ローマ字を應用し實際化したローマ
字の雑誌を御覽なさい！
◎ローマ字の日本式綴方の論據、要點等に就ては郵券二錢を御送
り下されば『ローマ字のすすめ』といふ小冊子を差上げます。

東京市本郷區駒込曙町十一番地

財團法人 日本ローマ字社

振替東京二一五〇四・電話小石川七〇一

秋田雨雀・小坂狷二共著

模範エスペラント獨習

改訂第十八版

ある西洋の教科書の焼きなほしではない。語系を異にする日本人の爲めに全く新しい様式で講義されたもので、
得る知識にエスペラントに熟達した人も他書に見出し
書留送料十九錢」

ブリヴァ著・松崎克己譯

愛の人ザメンホフ

他の萬國語が盡く失敗せる中にエスペラントの優美なる人びと
幾多の熱心者が崇めざるを得ない。主として、努力し、人々を
義に感ずる人々を主として、義務である。本書二〇〇頁、
エスペラントの類人主義の義務である。本書二〇〇頁、
料十三錢」

東京市牛込區目下二丁 文 閣 振替口座東京 九八八二四 番

財團法人日本エスぺラント學會發行圖書其他

エスぺラント捷徑	最新最良の獨習書 四六判60頁 價1圓送料6錢
エスぺラント初等講座	外國語をしらぬ人の入門書 價20錢 送料2錢
新撰エスと辭典	價75錢 送料2錢
エスぺラント讀本	初等用讀本 價30錢 送料2錢
エスぺラント講習用書	定價50錢 送料2錢
エスぺラントやさしい讀み物	笑話22篇の對譯詳註 特價10錢 送料2錢
エスぺラント發音研究	定價50錢 送料2錢
エスぺラント中等讀本	定價30錢 送料2錢
骸骨の舞跳	(秋田雨雀氏劇三曲篇エス譯) 價40錢 送料2錢
倫敦塔	(エス文) 價15錢 送料2錢
マテオ・フアルコネ	對譯叢書第一篇 價35錢 送料2錢

無代進呈 { ★エスぺラント宣傳の「**葉**」(講習會頒布用)
百枚以下無料(但送料卅枚毎に四錢)百枚以上百枚毎に實費送料共六十五錢にて
★エスぺラント宣傳の「**チラシビラ**」(街上展覽會等で配布すべきもの)
三百枚以下無料(但送料百枚毎に二錢)三百枚以上は百枚毎實費送料共十錢にて
——[直接當會宛申込に限る]——

★日本風景風俗エハガキ (四枚一組三色刷 價廿錢 送料二錢)(エス文説明付)

★綠星章 { 甲種(安全ピン止) 乙種(背廣用) 共に一個の價 送料共三十錢
丙種(安全ピン止 銀臺特製品).....一個 五十錢 送料六錢
カウスボタン 一揃 (箱入).....一圓二十錢 送料六錢

★綠星旗(紙製)(錢枚送料) 半紙大原紙兩面綠色刷、左角四分の一は白地に綠の星、
共十五錢 殘四分三は綠の地にエスぺラントと白く抜きたるもの
十枚以下賣りません

★エスぺラントの歌と其の譯 (四六倍大八頁 一部三錢 送料二錢)
十部送料共 二十錢

1928 年 度 雜 誌 の 取 次

1. **ESPERANTO** (月刊) 豫約額 { 雜誌のみの希望者 年4圓50錢
雜誌と年鑑希望者 年5圓50錢
2. **HEROLDO de ESPERANTO** (週刊) 豫約額 年額6圓25錢
3. **Bulteno de Internacia Scienca Asocio Esperantista**
會費 年額 1圓10錢 (會報は年四回)

東京市牛込區新小川町
振替口座東京 11325 番

財團 法人 日本エスぺラント學會

我國におけるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財團法人日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十四】 【振替口座東京 11325 番】

- ◆すべての運動は大衆の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時代。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大衆の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。
- ◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。(會員は法規上維持員とよぶ)

- 目 的** エスペラントの普及・研究・實用
- 事 業** (a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表
(b) 雜誌及圖書の刊行等
(c) 講演會、講習會の開催及後援
(d) 其他本會の目的を達成するに必要な認むる事業
- 會 費** (a) 普通會員 年額 2 圓 40 錢 (b) 贊助會員 年額 5 圓
(c) 特別會員 年額 10 圓以上 (d) 終身會員 一時金 100 圓
- 入會手續** 住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。
振替送金最も安全)
- 會 員 の 典** 1. 毎月研究雜誌“La Revuo Orienta”の配布をうく
2. 出版圖書の割引をうくることあり
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく
4. 宣傳の「榮」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接御問合せ下さい

役 員 名 簿 (五十音順)

理事長	理 學 博 士	中村 精 男	理 事	美野田 琢磨
理事		上 野 孝 男	慶大教授醫學博士	望月 周三郎
同	元鐵道省運輸局長	種 田 虎 雄	東京朝日新聞顧問	柳 田 國 男
同	東京女子大學教授	河 崎 な つ	鐵道省 技 師	小 坂 狷 二
同	中央大學教授	川原次吉郎		大 井 學
同		何 盛 三		三 石 五 六
同	帝大教授文學博士	黒 板 勝 美	監 事	高 層 氣 象 臺 長
同	政治教育會會長	小林鐵太郎	神奈川縣立農業學校長	大石和三郎
同	政修大學教授			清水勝雄
同	帝大名譽教授	高楠順次郎	顧問	木 崎 宏
同	文 學 博 士	土 岐 善 磨	帝大教授	穂 積 重 遠
同	東京朝日調查部長	西 成 甫	法學博士	三 島 章 道
同	帝大教授醫學博士		子	

本誌購讀料 (郵税共)			本會振替號		廣 告 料					發行所		
一部	半年分	一年分	口座番號	會計用	1回	3回	6回	12回	◆金銭に關係なき廣告四割引 ◆表紙第三頁は二割増の事 ◆表紙第二頁第四頁は二割引 ◆特別會員の廣告は二割引	印刷所	印刷人	編輯兼
24 錢	140 圓	260 圓	基本金専用東京三〇八九番	東京一三三番	全頁 25 圓	72 圓	140 圓	250 圓		株式會社一匡印刷所	高 見 澤 保 芳	大 井 學
			東京三二八三番	東京一三三番	半頁 13 圓	37 圓	74 圓	130 圓		東京市神田區西小川町二ノ五		
					四半頁 7 圓	19 圓	38 圓	70 圓		東京市牛込區新小川町三ノ十四		

昭和三年二月一日發行
昭和三年一月二十五日印刷